

国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修

日野, 伸一
九州大学大学院工学府

<https://hdl.handle.net/2324/19898>

出版情報 : 2011-06-30. 九州大学高等教育機構教育改革企画支援室
バージョン :
権利関係 :

平成22年度 教育の質向上支援プログラム(EEP)実績報告書

部局名	工学府																				
申請者(部局長)	日野 伸一																				
1. 取組の名称	国	際	工	学	教	育	環	境	整	備	と	若	手	教	員	の	海	外	研	修	
	(副題)																				
2. 取組実施担当者																					
ふりがな 氏名	担当学府・学部・職名						現在の専門						役割分担								
<small>ふるかわ あきのり</small> 古川 朗徳 <small>わたなべ こういちろう</small> 渡邊 公一郎 <small>やまさき のぶひこ</small> 山崎 伸彦	工学府・教授(教育企画委員会委員長) 工学府・教授(国際連携委員会委員長) 工学府・教授(前教育企画委員会副委員長)						機械工学 地球資源システム工学 航空宇宙工学						代表者、海外研修 選考担当 異文化紹介担当 英語教材開発担当								
3. 実施・評価・改善のための組織体制の活動状況																					
(取組計画書の「実施・評価・改善のための組織体制」を転記のこと。) 工学府改組の検討において、改組後全専攻にグローバルコースを設置することに決めた。そこで、国際工学教育環境を整備することが急務と考え、工学研究院にWGを立ち上げた。WGの任務として、現教員の「英語による工学教育力のレベル」を認識したうえで、それを補うために、(1)若手教員の英語による工学教育技術の海外研修、(2)英語教材に関する収集(海外大学での講義ネット配信)や開発・整備を企画し、その成果を工学府FD等において全教員に公表し、全体のレベルアップを図る。加えてWGでは(3)海外留学生が抱える宗教上の習慣等についても周知徹底を図り、異文化理解に努める。											活動状況(会議等の開催日、検討内容等) 平成22年4月1日に工学系国際交流支援室を設置した。英語教育の向上を目的に、若手教員の学内研修(5G=Iセミナー)を平成22年8月7日から9日にかけて、またハワイマノア大学での海外研修を平成22年9月13日から24日の12日間で開催した。平成22年4月と10月の2回、国際交流会を催した。平成22年度6月28日より支援室の外国人講師による職員向けの英語コースを3ヶ月を1期として3期に分けて開催し、3期目では受講クラス拡大に伴い週3回開講した。教員向けについても平成23年度1月18日より開講し、17:00-18:30の時間帯で16回にわたり実施中である。本EEP終了後も、英語による工学教育の向上に向けて新たな企画を検討したいと考えている。										
4. 取組に係る具体的な成果(教員の意識向上等取組の波及効果等)																					
本事業は、工学府内の全専攻に国際英語(グローバル)コースを設置するに当たり、工学府の国際工学教育環境に関する現状を認識し、教員の英語による教育力のレベルアップを中心に置き、教員サイドの教育環境整備を行うための仕組みづくりである。それゆえ、本事業をきっかけに全教員の国際工学教育に対する意識改革をもたらしたものと確信する。事業終了後も、ここで構築した仕組み(WG)をベースに、経費に特別の支障をきたさない限り、国際交流支援室職員およびG30外国人教員を講師として研修の継続を検討中である。また、研修を中心として本事業展開で得た成果及び取り組み方法については、これから実質的な国際大学を目指す九州大学の他部局にも情報発信していきたい。																					

平成21/22年度教育の質向上支援プログラム(EEP)

国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修

実施報告書

工学研究院・工学府

目 次

1. 申請概要	4
1. 1 取り組みキーワード	
1. 2 取り組み概要	
1. 3 取り組み実施担当者	
1. 4 取り組みの内容等	
1. 4. 1 趣旨・目的	
1. 4. 2 取り組み内容	
1. 4. 3 中期目標および中期計画との関連	
1. 4. 4 各年度の実施計画	
1. 4. 5 実施・評価・改善のための実施体制	
1. 4. 6 経費措置終了後の計画、取組の波及効果等	
2. ヒアリングでの条件・意見等とその対応	7
2. 1 申請ヒアリング	
2. 2 中間ヒアリング	
3. 若手教員の海外研修	8
3. 1 研修先の選定と決定までの経緯(経費や問合せ先, 募集要領等)	
3. 2 平成21年度	
3. 2. 1 研修期間と研修スケジュール	
3. 2. 2 研修者リスト	
3. 2. 3 研修者の声	
3. 3 平成22年度	
3. 3. 1 研修期間	
3. 3. 2 研修者リスト	
3. 3. 3 研修内容と研修者の声	
3. 4 まとめ	
4. 若手教員の学内英語研修(5G=Iセミナー)	15
4. 1 学内研修を始めるに当たって(募集要領等)	
4. 2 平成21年度	
4. 2. 1 研修期間	
4. 2. 2 研修者リスト	
4. 2. 3 研修内容と研修者の声	
4. 3 平成22年度	
4. 3. 1 研修期間	
4. 3. 2 研修者リスト	
4. 3. 3 研修内容と研修者の声	
4. 4 まとめ	
5. 異文化理解	21
5. 1 国際交流支援室の設置	
5. 2 国際交流会の開催	
5. 3 異文化理解_食生活編	

6. その他	39
6.1 教材開発	
6.2 英語セミナー開設(教員向け, 事務職員向け)	
7. Faculty Developmentの開催	40
7.1 農学研究院「英語による教育の質向上を目指して」	
7.1.1 講演資料	
7.1.2 参加者アンケート集計結果と声	
7.2 EEP「国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修」活動の概略説明	
7.2.1 講演資料	
7.2.2 参加者の声	
7.3 「海外研修」および「5G=Iセミナー」参加者による部門・専攻でのFD開催実績	
7.4 まとめ	
8. 経理報告(平成21年度および22年度の当初予算と執行額)	50
9. 総括	50

1. 申請概要

1. 1 取り組みキーワード

大学院英語国際コース設置, 国際工学教育環境整備, 全教員国際化, 優秀留学生輩出, 世界的認知度アップ

1. 2 取り組み概要

工学府改組の検討において, 改組後の全専攻に英語国際コースを設置することを決めた。そこで, 国際工学教育環境を整備することが急務と考え, 工学研究院に「ワーキンググループ(WG)」を立ち上げた。WG の任務として, 現教員の「英語による工学教育力のレベル」を認識したうえで, それを補うために, (1)英語教材に関する収集(海外大学での講義のネット配信)や開発・整備, (2)若手教員の英語による工学教育技術の海外研修, を企画し, その成果を工学府FD等において全教員に公表し, 全体のレベルアップを図る。加えてWGでは, (3)海外留学生が抱える宗教上の習慣等についても周知徹底を図り, 異文化理解に努める。

1. 3 取り組み実施担当者

氏名	職名	現在の専門	役割分担
古川明德	H21工学府教育企画委員会委員長	機械工学	代表者 海外研修選考担当
渡邊公一郎	H21工学府国際連携委員会委員長	地球資源システム工学	異文化紹介担当
山崎伸彦	H21工学府教育企画委員会副委員長	航空宇宙工学	英語教材開発担当

1. 4 取り組みの内容等

1. 4. 1 趣旨・目的

工学府改組(平成22年度概算要求事項)において, 改組後の全専攻に英語国際(グローバル)コースを設置することを決めた。これは, 大学院修士課程において日本語による教育に入学を躊躇していた優秀な海外留学生, および国際人として世界にはばたくことを夢見る日本人学生を修士課程から入学させて国際工学教育を行い, 世界のリーダーとして活躍し得る人材輩出を目的とするものである(現状を述べると, 研究を主体とする大学院博士後期課程には既に定員の20%が海外からの留学生である一方, 講義等のスクーリングが主体の修士課程では定員のわずか5%の留学生でしかない)。英語国際(グローバル)コースの速やかな実施には, 国際工学教育環境を整備することが急務である。そこで, 工学研究院に設置の「教育企画委員会」と「国際連携委員会」が連携して「ワーキンググループ(WG)」を立ち上げた。WG の任務として, 現教員の「英語による工学教育力のレベル」を認識したうえで, それを補うために, (1)英語教材に関する収集(海外大学での講義のネット配信, Open Course Ware)や開発・整備を行うとともに, (2)若手教員の英語による工学教育技術の海外研修を企画する。加えて, (3)海外留学生が抱える宗教上の習慣等についても周知徹底を図り, 異文化理解に努める。それらの成果は, 工学府FD等において全教員に公表して, 全体の国際工学教育レベルアップを図る。

1. 4. 2 取り組み内容

工学研究院内に立ち上げた「国際工学教育環境整備WG」における任務は, 前述の通り, (1)英語教材に関する収集・開発・整備, (2)若手教員の英語による工学教育技

術の海外研修企画、(3)海外留学生が示す異文化理解、である。実施体制として、工学府における専門分野を「機械・エネルギー」、「地球環境」、「物質科学」の専門性の近い三分野に分け、各任務担当リーダーに各分野から一人の教授(一任務に3人教授)を充て、分野別および全体共通の事項を調査・検討する。そして共有できる情報は機会あるごとに(学府FD等を通して)情報発信する。

任務(1)については、海外大学での講義のネット配信、Open Course Ware、テキスト採用状況などから、とくに欧米一流大学での工学教育での教材に関する情報収集を行う。現存の日本語での講義内容を英語化するだけでなく、積極的にオリジナル教材の開発・整備を進めるために、希望の教員にアイデアを募り、個別の情報収集・教材開発・整備への補助を実施する。

任務(2)の「若手教員の海外研修」については、目下のところ、[1]毎年、全学募集が行われているフィリピンでの英語教育研修、および[2]カリフォルニアオフィス企画の英語研修プログラムの積極的利用を考えている。前者[1]の募集に対しては実施時期もあって工学研究院からの応募は極めてゼロに近いが、これはWGをベースに不在時の側面サポートに配慮し参加し易い環境を作ることが求められていると認識している([2]についても同様)。過去においては、文科省の在外研究や工学部 75 周年記念基金による長期研修が実施されていたが、最近ではその機会が無い状態にある。そこで若手教員のなかには、半年を越える海外の大学や研究機関での研修経験が無い者も多数いる。また研究主体の海外研修ゆえに研修中に教育機会を持っていない者もいる。本事業では、そのような若手教員を優先して研修に出す。その人数は、分野別に1名で計3名を[1]と[2]を合わせて2年間で4回、計12名を派遣したいと考えている。必要に応じて、任務(1)の情報収集を兼ねることもありうる。計上している経費の多くは、この派遣費用である。

1. 4. 3 中期目標および中期計画との関連

中期目標として「九州大学は、世界中の人々から支持される質の高い高等教育を一層推進」、「世界的研究・教育拠点にふさわしい教育を実施するために、教育組織及び実施体制を整備・強化」、さらに「世界的研究・教育拠点として、教育の国際化を推進」と掲げており、その中期計画において「教育の成果に対する国内外からの評価において高い水準を維持」、「教育の状況及び教育の成果に関する定量的・定性的な分析を継続的に行い、教育内容・方法等を改善」、「教育の国際化を推進するために、英語による教育課程や海外の学生に魅力あるプログラムを整備・充実」及び「留学生向けプログラム及び受入体制の拡充を通して、外国人留学生の平成20年度の1300名から倍増」と謳っている。本事業は、ここに掲げた中期目標・中期計画を具体的に展開するための教員サイドにおける基本的活動のスタートとして不可欠なものと考えている。

1. 4. 4 各年度の実施計画

工学府国際英語(グローバル)コースは改組後の平成22年度より開始される。それゆえ、円滑なコース開始を迎えるため、本事業は今年(平成21年度)からの2年間を考えている。「国際工学教育環境整備WG」を立ち上げて各任務を徹底審議した後、(1)英語教材に関する収集・開発・整備、(2)若手教員の英語による工学教育技術の海外研修企画、(3)海外留学生が示す異文化理解、について調査・検討に入る。まずWGの設置と実施計画を全教員に周知させるためFDを開催する。その後、今冬の海外派遣を目指して任務(2)について急ぎ企画を進める。そして年度終わりには再度FDを開催して、各任務の進捗状況報告と研修終了教員からの帰朝報告を行う。その質疑を踏まえて、次年度(最終年度)のWG活動に生かす。

1. 4. 5 実施・評価・改善のための実施体制

工学研究院に設置の「教育企画委員会」と「国際連携委員会」が連携して、「国際工学教育環境整備WG」を立ち上げる。その実施体制は前述の通り、工学府における専門分野を「機械・エネルギー」、「地球環境」、「物質科学」の専門性の近い三分野に分け、各任務担当リーダーに各分野から一人の教授（一任務に3人教授）を充て、分野別および全体共通の事項を調査・検討して、機会あるごとに（学府FD等を通して）情報発信する。

1. 4. 6 経費措置終了後の計画、取組の波及効果等

本事業は、工学府内の全専攻に国際英語(グローバル)コースを設置するに当たり、工学府の国際工学教育環境に関する現状を認識し、教員の英語による教育力のレベルアップを中心に置き、教員サイドの教育環境整備を行うための仕組みづくりである。それゆえ、本事業をきっかけに全教員の国際工学教育に対する意識改革をもたらすものと確信する。事業終了後も、ここで構築した仕組み(WG)をベースに、経費に特別の支障をきたさない限り、継続されていくものと考えている。また、これから実質的な国際大学を目指す九州大学の他部局にも、本事業で得た成果を情報発信していきたい。

2. ヒアリングでの条件・意見等とその対応

2.1 申請ヒアリング

【付加条件】 なし

【参考意見】 本取組が教育の質を向上させるためのカリキュラムの見直しにつながることを期待する。

取組の成果が様々な規模・形態のFDの実施等により着実に組織全体に波及されるよう努められたい。

【対応状況】 (1)「英語教材に関する収集・開発・整備」について：グローバルコースでの講義担当に対し、単に担当者の意志に任せるのではなく関連分野の教員同志の情報交換となる資料をWGから提示した。講義がより実効上がるかたちでの打ち合わせが逐次、行われている。G30プログラムの展開に伴い外人教員6名が本年度中に採用になることが決まったことを受け、今年度の残る期間および次年度に向けて外人教員を交えた本項目に関する検討を行う予定である。

(2)「若手教員の英語による工学教育技術の海外研修企画」について：学内および学外(海外)での研修プログラムを、あてがわれた既設のプログラムではなく、九大工学府独自の研修内容として企画し、今後の継続実施に繋がるかたちを出すことができた。この研修への参加の意義をFD等を通して教員にアピールすることにより、全教員の意識向上に繋がるものとする。

(3)「海外留学生が示す異文化理解」について：教員と留学生が一堂に会する「国際交流会」の継続実施に加えて、留学生へのアンケート等を通して、学究生活環境へのサポート体制をより強化にするとともに、そのサポートに全教員が参画できる体制に持っていけるように今後活動したい。

2.2 中間ヒアリング

中間評価結果：《A》

【参考意見】 5G=Iセミナーや国際交流会等の優れた取り組みが数多く行われている。大学の国際教育環境整備のノウハウとしてまとめ、他の部局に紹介して欲しい。

3. 若手教員の海外研修

3.1 研修先の選定と決定までの経緯(経費や問合せ先、募集要領等)

「英語教育の海外研修」を行うにあたり、当初は、九州大学において既に企画開催されている《1》カリフォルニアオフィス企画の英語研修プログラム(YREP, 平成21年度は8月3日(月)～8月28日の4週間で実施)、または、《2》職員海外研修プログラム(アテネオ・デマニラ大学, 平成21年度は4月に実施)の次年度分への参加、および、《3》個人が独自の研修先・研修プログラム(教育として、～3週間程度)を企画提案して実施のいずれかを考えていた。そのようななか、GCOEで英語教育を含む教育プログラム支援担当の田村美香氏より、海外では、ハワイ大学マノア校の”New Intensive Courses in English(NICE)”(<http://www.nice.hawaii.edu>)があり、グループ向けカスタムプログラムを準備してくれるとの情報を得た。そこで「国際工学教育環境整備WG(表1)」において検討した結果、小江誠司先生にマノア校と詳細を詰めていただくこととし、企画立案をお願いすることとなった。小江誠司先生は自費にて現地に出向かれ研修先として適切であることを確認してこられ、九州大学工学府独自のカリキュラムとして、この度の実施になった。記して謝意を表す。

表1 「国際工学教育環境整備WG」の構成

任 務	SWG長	専 門 分 野			担当 委員会
		機械・エネルギー	地球環境	物質科学	
海外研修	古川明德	出光一哉	松井紀久男	小江誠司	教育企画
教材開発	山崎伸彦	野口博司	安福規之	東田賢二	学務
異文化理解	渡邊公一郎	安倍賢一	梶原宏之	上平正道	国際連携

図1に平成21年度に行った研修募集案内を示す。

平成21年度 教育の質向上支援プログラム (EEP)
「国際工学教育環境整備と若手教員の海外派遣」

工学府は、全学の「教育の質向上支援プログラム」に採択され、「国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修」をテーマに掲げ、プログラムを展開中であり、事業展開の一環として、本年度は、下記に募集します二つに研修を企画致しました。

つきましては、ここに研修生の募集を行いませんので、積極的なご応募を宜しくお願い申し上げます。なお、本プログラムの期間は2年ですので、平成22年度も同様の研修を企画予定であります。

EEP 担当：古川明德教授 (fufurus@mech.kyushu-u.ac.jp)
工学府等事務部係長 (fujinami.yasutoshi.910@m.kyushu-u.ac.jp)

① 肥田良夫先生による「教員対象5G=1(ご自愛)セミナー」の研修生募集

開催期間：平成21年12月12日(土)～14日(日)
開催会場：九州大学伊都キャンパス講義室(選考中)
募集人員：最大20名(准教授(講師) > 教授 > 助教の順に優先)
研修概要：2分間の自己紹介スピーチ、5分間の専門テーマのプレゼン、そして5分間の自由テーマによるプレゼンを通し(セミナー開始日前までに宿題として作成)、当日に座長、質問者、発表者の役割を分担しながら研修を受けて頂きます。研修時の指摘事項を改善して再度プレゼンを行い、発表と討論の技術および発表内容を磨いて頂きます。

参考資料：添付の資料①をご参照下さい。
諸費用：無料 (各自が作成する資料については自費でお願いします)
企画取り纏め：出光一哉教授 (demitsun@mech.kyushu-u.ac.jp)

なお、セミナーに参加された先生方には、研修実施報告書の作成と工学府FDセミナーにおける報告を行なって頂きます。また、土・日の開催ゆえに振り替え休日を取っていたがきます。

②ハワイ大学マノア校における英語教育研修参加者募集

研修期間：平成22年3月8日～19日(予定、現地滞在期間)約2週間
研修場所：ハワイ大学マノア校(米国ハワイ州オアフ島(添付資料②の2ページ目))
募集人員：6名(准教授(講師) > 教授 > 助教の順に優先)
研修概要：2週間の九州大学工学府研究員向け英語教育研修プログラム(資料②の3ページ目)で、英語でのプレゼンテーション・ディベート力養成による英語力向上が目的です。1日4時間の講義ですが、多くのホームワークを期待され、かなりの集中学習が望まれます。

旅 費：EEP 予算より出張旅費1人最大 約40万円(研修費別)
宿 舎：研究者用宿舎(資料②の4ページ目)またはホテル
参考資料：添付の資料②をご参照下さい。
企画取り纏め：小江誠司教授 (cgotoku@mail.cstm.kyushu-u.ac.jp)

なお、研究に参加された先生方には、研修実施報告書の作成と工学府FDセミナーにおける報告を行なって頂きます。

図1 平成21年度研修募集案内

3. 2 平成21年度

3. 2. 1 研修期間と研修スケジュール

平成22年3月8日から19日の12日間で行われた。その研修の当初の実施スケジュール(図2), 研修風景(図4), 修了証(図3)を示す。

SAMPLE SCHEDULE
FOR KYUSHU UNIVERSITY TWO-WEEK SPECIAL ENGLISH PROGRAM (40 hours)
International Programs of Outreach College - University of Hawai'i at Mānoa

SUN.	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SAT.
	12:30-1:30 Welcome Reception: Greetings and Introductions	12:30-4:30 Class	12:30-4:30 Class	12:30-4:30 Class	12:30-4:30 Class	
	1:30-2:30 Orientation & Campus Tour	The English Language Classroom	English Interaction	English Interaction	English Interaction	
	2:30-4:30 Class					
	The English Language Classroom (4hrs)		(4hrs)	(4hrs)	(4hrs)	
	12:30-4:30 Class	12:30-4:30 Class	12:30-4:30 Class	12:30-4:30 Class	12:30-3:30 Class	
	PowerPoint Presentations	PowerPoint Presentations	PowerPoint Presentations	PowerPoint Presentations	3:30-4:30 Closing Ceremony	
	(4hrs)	(4hrs)	(4hrs)	(4hrs)	(4hrs)	

Note:
- Number of participants: up to 10



図2 当初の研修スケジュール

図3 修了証



English Interaction with Ms. SuLing Len

図4 研修風景

3. 2. 2 研修者リスト

世話委員: 小江誠司(応化機能)

准 教授: 新留康郎(応化分子), 中山裕文(環境都市), 木村 元(海洋システム), 岡部
弘高(エネルギー-量子), 河江達也(エネルギー-量子), 菊植 亮(機械工学)

の計7名

3. 2. 3 研修者の声

<α先生> ハワイ大の受入担当部署は異文化の接触と英語教育を担うところで、今回の研修についても良くできており、良い経験をさせていただきました。研修自体で良かったと思う点は以下の通りです。

- ・ 研修のはじめの方で日本人と英語国民の意思疎通についての違いが講義として入り、以後の研修に役立った。講師は米国以外や企業でも通訳経験があるプロ意識の高い熟練者で、日本人の扱いも慣れており、相手に対して敬意を抱きつつ学ぶこと

が出来た。

- ・ 九大から7名の参加者と比較的少人数による研修だったので、講師と参加者のやりとりが密でお互いが常に緊張感を保ちつつ、密度の高い研修になった。
 - ・ 模擬授業では、通常の授業に比べて専門性を低くして内容を練り直したが、これは分かりやすい授業をするための訓練となった(ただし、その場合は授業の進度が落ちるので、そのまま授業に利用するというわけにはいかないが)。
 - ・ 適宜適切な英語表現とその理由を説明してもらえたが、このような機会は通常の渡航ではなかなか得られない。
 - ・ 学生との意思疎通を行いつつ進める米国風授業の進め方について知ることができ、今後の授業の参考になった。
 - ・ 模擬授業に関して相互に評価を行い有益な意見をもらうことができた。また、他の参加者から学ぶことが多かった。
 - ・ 専門性が違う参加者が集まったので、専門的にも参考になる意見を多数もらった。
- **<β先生>** 本セミナーは単なる英会話力改善コースではなく、九大側のニーズに合わせた講義内容になっていたので2週間という短期間ながら我々が講義を行うにあたって実際に役に立つ知識をたくさん仕入れることができました。ハワイ大学のベテランの語学教師が担当についてくれたので、教員の専門の壁を越えて十分なディスカッションや質問を引き出してもらえたと感じております。英語力の改善という点でももちろんですが、授業内容を改善する上でも大変有意義なセミナーでした。

第1週目は Intercultural Interaction をメインのトピックスとして、色々な話題を英語で討論／発表することで授業が進行しました。自分の専門外の単語を非常にたくさん要求されるプログラムでしたので、かなりストレスの高いものでした。

第2週目は15分間の英語講義を参加者が行い、問題点／改善点などを指摘・討論するというプログラムが主となりました。現地担当教師(女性)を含めて、他部門の教員にもわかりやすい内容を15分の時間制限内で用意することは大変難しく、さらに学会講演等では省いてしまう極めて基礎的な概念にかかわる英語表現に四苦八苦しました。1件の講義に45分以上の討論を行い、自分の講義についてはもちろんですが、他の参加者の講義からも多くの助言や改善点の指摘を得ることができました。他部門の方に講義を見てもらう機会はこれまでありませんでしたし、しかも英語授業ですので問題点のはっきりとし、お互いに率直に問題点の指摘ができたことは大変貴重な経験であったと思います。現地担当教師も我々の講義を理解するために最大限の努力を払ってくれて、講義の問題点と本人が理解できない部分をしっかり切り分けて討論をリードしてくれたことが大変印象的でした。

<γ先生> 全体として、非常に有意義な研修でした。前半一週間においては、主に英語での実務的な意見交換の仕方について学びました。また、後半一週間においては、15分の模擬講義を各自2回ずつ行うというものでした。講師の先生(SuLing Len氏)は、非常に明確で分かりやすい講義をして下さいました。前半の研修はLen氏がおそらくご専門とされる内容で、長い経験から得られた優れた教授法であると感じました。後半においては、我々のプレゼンが工学の専門的な内容であったにもかかわらず、Len氏からは、プレゼンの論理的な構造、説明の順序、話し方などについて、極めて的確なご指摘を頂くことができました。前半部で得られた効果としては、自分の意見の表明の仕方、他者の意見への反対意見の述べ方など、実務的な語彙や言い回しなどのバリエーションが増えたということが挙げられます。後半部での収穫としては、講義における全体の構成方法(アウトラインや結論など)や、間の取り方、学生を巻き込む講義のノウハウが挙げられます。模擬講義で行ったのはアウトラインのみのプレゼンでした。

が、そこからどのような手順でディテールを伝えていくのかということについても大きなヒントが得られたと感じます。意見としては、(入国ビザの問題もあり困難かと思いますが、)一日あたりの講義の時間がもう少し長くなれば良いのでは感じました。また、(費用の問題もあるとおもいますが、)ネイティブのティーチングアシスタントが付けばさらに効果が上がるのではと感じました。なお、今回の研修の主旨から外れていたからかと思いますが、発音やイントネーションについてはあまり細かい指摘が無いように感じました。講義時間が長くなれば、この点についてもカバーできるのではと思います。

****<δ先生>**** ハワイ・マノア校でのセミナーに参加して感じた印象を簡単に述べさせてもらいます。まず、ハワイ大学の女性担当教師が非常に有能な方で、非常に質の高いセミナーを受講できたと思っています。その点が最も印象に残っています。彼女は授業を進めていく上で、日本人が一般的に苦手と思われるポイントをあらかじめ把握しておき、同時にそれを再認識させるような方法で授業を進めているようでした。彼女は「相手の背景をはっきりと認識することが良い授業を行うためのポイントである」と強調していましたが、彼女の授業からそれをはっきりと認識することが出来ました。その点では英語に限らず、日本語の授業改善においても非常に役立つセミナーでした。授業に対する具体的な感想は以下の通りです。1週目は Intercultural Interaction というタイトルで、いろいろな話題を討論しそれを短時間でまとめて、皆に発表するというものでした。普段そのようなことに慣れておらず戸惑いも大きかったのですが、ポイントを短時間でまとめて相手に説明することの重要性を再認識できました。また2週目は各自が15分間で英語講義を行い、担当講師、参加者がその批評を行うという内容だったのですが、これも非常に約立つものでした。自分自身の視点から講義を組み立てても、相手にはほとんど理解されないことを痛感させられました。また限られた時間の中、伝える情報を取捨選択していくことの重要性も強く認識させられました。講義対象が学生の場合、遠慮もあってか授業に対してそれほど強く意見を言われることはありませんでした。今回は講師がうまくコントロールしながら講義内容、英語表現などについて他分野の先生からの遠慮なしの批判、率直な意見を引き出してくれたため、私にとっては非常に建設的な場となりました。日本ではお互い遠慮もあるため、このような場を持つことは不可能に近いと思いました。最後に蛇足かもしれませんが、もしこのプログラムを来年以降続けるならば、実施時期については考慮の余地があるような気がします。皆さん年度末の非常に忙しい時期に参加されていると思いますが、もしこの時期を避けることが出来ればよりセミナーに集中できるため、さらなる教育効果が期待できるような気がします。

****<ε先生>**** 参加しての感想は次の通りです。

1. 良かった点

- ・ハワイ大学の講師の方が経験豊富であり、体系的な英語教育プログラムと適切な教材が準備されていたこと。
- ・英語による模擬講義(15分)とその後の講師からの指摘(45分)の時間がしっかりと確保されていたこと。模擬講義は一人につき2回実施することができた。
- ・英語講義のTIPSだけでなく、留学生とのコミュニケーションの取り方についても丁寧な指導を受けることができたこと。
- ・九大工学部の他部門の先生方と一緒に参加することができ、模擬講義ではハワイ大学の講師だけでなく九大の先生方からも貴重なコメントをいただくことができたこと。
- ・宿泊施設と講義を受講した教室が非常に近く、便利であったこと。食事についても不便はなかったこと。
- ・参加者が7人と少人数であったため、徹底した指導を受けることができたこと。

・2週間という期間は、長くもなく、短くもなく、適切であったと思う。

2. 改善すべき点

・旅費支給の都合上、朝9時にハワイに到着してその日の午後からすぐに講義が始まったが、疲労していたので初日の講義内容をよく覚えていない。できれば前日入りするスケジュールを許可してほしかった。

その他にも寄せられたが省略

3. 3 平成22年度

3. 3. 1 研修期間と研修スケジュール

平成22年9月13日から24日の12日間で行われた。その研修スケジュールを図5、授業風景を図6に示す。

TENTATIVE: Kyushu University Special English Program
International Programs of Outreach College - University of Hawai'i at Mānoa

September 13 - September 24, 2010 Revised: 9/3/10

Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
12	13	14	15	16	17	18
	12:30 – 2:00 Welcome Lunch: Greetings, Introductions, and Orientation (@Campus Center Room 203E) 2:00 – 4:30 English Interaction	12:30 – 1:30 English Interaction 1:30 – 2:30 Interchange 2:30 – 4:30 English Interaction	12:30 – 2:30 English Interaction 2:30 – 4:30 Lecture: Intercultural Communication by Dr. Min-Sun Kim	12:30 – 1:30 English Interaction 1:30 – 2:30 Interchange 2:30 – 4:30 English Interaction	12:30 – 4:30 English Interaction	
19	20	21	22	23	24	25
	12:30 – 4:30 Student Presentations	12:30 – 4:30 Student Presentations	12:30 – 4:30 Student Presentations	12:30 – 4:30 Student Presentations	12:30 – 3:30 Student Presentations 3:30 – 4:30 Closing	

Instructor: SuLing Len
Classrooms: Mandarin Room (1st week) and Washington Room (2nd week), East-West Center Imin Conference Center except for lunch on Monday, Sept. 13.

図5 平成22年度研修スケジュール

なお、このスケジュールについて補足すれば次の通りである。

- 9/15 (Wed.): Conversation strategies, Intercultural Communication prep., 講演内容の Prediction について, Intercultural Communication の講演と質疑応答
- 9/16 (Thu.): Organizing ideas, Interchange (2 回目)



(a) Intercultural Communication 講演

(b) プレゼンテーション

図6 授業風景(その1)



(c) ディスカッション(プレゼンテーション後) (d) 修了式

図6 授業風景(その2)

9/17 (Fri.): 昨日のブレインストームのロールプレー, 学生から見たよい講義に関するブレインストーミング, Information questions, 話題をくじで引いての Mini-presentation

9/20 (Mon.) – 21 (Tue.): Evaluation (Peer, Instructor and Self) 技術説明, プレゼンテーション 1 回目, Instructor and Peer Evaluation の練習

9/22 (Wed.) – 23 (Thu.): プレゼンテーション 2 回目, 1 名が 1 回目と同じ内容でブラッシュアップ, 他は別テーマ, 全体講評

9/24 (Fri.): 総括, 修了式

3. 3. 2 研修者リスト

世話委員: 山崎伸彦(航空宇宙)

准教授および助教: 井藤 彰(化学), 伊藤衡平(機械), 木原 尚(航空宇宙), 佐川康貴(建設デザイン), 陳 光斉(建設デザイン), 藤井 光(地球資源システム), 松野寿生(応用化学)

の計8名

3. 3. 3 研修者の声

- ・英語を母国語としない者にとって単調になりがちな口語表現において, 状況に応じた多くのバリエーションを実用例を交えて学ぶことができ, 有用であった。
- ・各自が研修期間中に2度行ったプレゼンテーションでは, 表現法や内容に関する詳細なフィードバックを講師から受け, 英語での講義や講演の質を向上することができた。
- ・学会等でネイティブスピーカーによる講演を聞く機会があったが, ネイティブによる講義, 特に, 学生とのやり取りが多いスタイルの講義を体験する機会がこれまで無かったので, この点において, 今回のプログラムは大変有意義であった。また, 講義に対する姿勢も日本人学生とは多くの異なる点があり, 今後の講義スタイルを改良するためのきっかけを掴めたことも有用であった。
- ・本プログラムを通じて, 英語(国際)コミュニケーションと英語プレゼンテーション法を学びました。今後, 国際化していく大学教育において, この経験は必ず財産になると感じています。この素晴らしいプログラムを多くの九大教員が享受できるように, 本プログラムが再び行われることを願っています。
- ・講義や講演をするにあたって重要なのは, 内容を説明することはもちろん, 相手(学生など)とのコミュニケーションをはかることの方が重要であることを認識することができた。また, コミュニケーションスキルを上達させるためのさまざまな表現, 構文などを学ぶことができた。しばらく経過して, ハワイ大学マノア校に再訪し, さらにスキルアップできるようなプログラムが設けられることを希望します。

- ・大学の先生を対象とするという異色の語学研修プログラムでしたが、柔軟で実効性のあるプログラムとなっていました。本講義の中に、外国語での講義でも「dumb down (over-simplify) するな !!」ということがあったのですが、自分が外国語を使う際に心しておかなければならないと考えています。参加者の緩い、それでいて確固たる一体感もあって、英語研修として、また大学教員の研修として、非常に有意義でした。
- ・通常の学会発表では、一方通行で終わることがほとんどだったが、英語圏の人間のモノの考え方、外国人相手に伝えるための様々な手段などこちらがなかなか気を回さらないところについて、勉強させていただきました。また、専門外の方々と交流でき、丁寧な説明の大切さを実感させられ、大変ためになりました。
- ・2週間ということで、通常の海外の会議より少し長い期間生活することで、「ハワイ」という過ごしやすいいところにもかかわらず、予想以上にストレスがかかることも感じられました。
- ・本研修では、英語によるコミュニケーションとは何ぞや、日本語、日本文化との差異を明確に認識しながら学べたことが第一の収穫であった。更に、授業で教えることは、授業はどうあるべきか、と本質的な部分を理解できたことも大きい。何れに対しても、このような機会を与えてくれた関係各位、担当教員の SuLing へ深く感謝したい。加えて、この機会を通して他専攻の教員と、様々な話題を通して親交を深めることができたことも大変有意義であった。このような有意義な事業を、今後とも継続して多くの教員が機会を得ることを願うとともに、今回親交を深めることができた教員との関係を大事にしたいと考える。
- ・英語による授業や発表の在り方において大変勉強になりました。早速実践しております。
- ・研修時間はもう少し長くしてほしいです。

3.4 まとめ

工学府では、英語教育に関する海外研修をはじめて実施した。工学府 FD において海外研修参加の意志を問うと27名近くの教員が参加の意志を示したにもかかわらず、実際に募集を行うと7名しか申し出が無く状況であった。したがって開催時期が悪かった平成21年度が7名、夏休みに持ってきた平成22年度が8名と少ない数に終わってしまった。この結果は、先生方の忙しさゆえに生じたことと信じたい。参加に躊躇されることがあったとすれば、先生方の意識改革をお願いしたいものである。ただ参加頂いた15名の先生の「声」には、「参加してよかった」、「勉強になった」とのことであり、経費的に許すならばこのような研修(レベルに応じたステップ毎の)が引き続き企画されることを望む。

4. 若手教員の学内英語研修(5G-Iセミナー)

4. 1 学内研修を始めるに当たって(募集要領等)

3章の海外研修に参加するには2週間の期間が長すぎる。長期には大学を空けておくわけには行かないという先生方の声も耳にした。そこで、多くの先生方に英語教育の研修を受けて頂きたいとの「国際工学教育環境整備WG」委員の気持ちから、大学院の学生向けに英語研修を開講しておられ、受講生から好評を得ておられる(株)ヒューテックの肥田良夫先生に学内研修をお願いすることとなった。募集案内は3章で示した図1に掲示している。

4. 2 平成21年度

4. 2. 1 研修期間と研修スケジュール

研修は平成21年12月12日(土)～14日(月)にかけて開催され、その研修スケジュールを図7に、授業風景の様子を図8に示す。



図8 授業風景

平成21年度5G-Iセミナー 実施日程
平成21年12月12日(土)～14日(月) 場所:ウエスト2号館931室(プレゼンテーション演習室)

時間	日程		
	12/12(土)	12/13(日)	12/14(月)
9:00	受付		□自由課題レッスン(3)
9:30	開講式&オリエンテーション	□規程課題レッスン(3)	各自5分間の自由テーマ
10:00	□自己紹介レッスン	各自5分間の専門テーマ	の
10:30	各自2分間の自己紹介	の	発表練習
11:00	・効果的な自己紹介	発表練習	・座長練習
11:30		・効果的な質疑応答	まとめ&閉講
12:00	昼休み	昼休み	
12:30			
13:00	□規程課題レッスン(1)	□自由課題レッスン(1)	
13:30	各自5分間の専門テーマ	各自5分間の自由テーマ	
14:00	の	の	
14:30	発表練習	発表練習	
15:00	・役割分担(座長、時計係)	・TPOに合わせたプレゼン	
15:30	休憩	休憩	
16:00	□規程課題レッスン(2)	□自由課題レッスン(2)	
16:30	各自5分間の専門テーマ	各自5分間の自由テーマ	
17:00	の	の	
17:30	発表練習	発表練習	
18:00	・効果的なプレゼン	・活発な質疑応答	
宿題	ビジュアルの修正	ビジュアルの修正	

*内容は予定であり、実際にはレッスンの事例によって注力点は異なる。

図7 平成21年度研修スケジュール

4. 2. 2 研修者リスト

世話委員:出光一哉(エネルギー量子)

准教授:魚住和弘(エネルギー量子), 水木 博(化学工学), 榎本尚也(応化機能), 松浦和則(応化分子), 大嶺 聖(建設デザイン), 大枝良直(環境都市), 後藤浩二(海洋システム), 蔵田耕作(機械工学), 外本伸治(航空宇宙), 浅井光輝(建設デザイン),

助教:松浦秀明(エネルギー量子), 田中将己(地球資源システム), 菅井裕一(材料工学)

の計14名

4. 2. 3 研修者の声

<A 先生>

- ・英語によるコミュニケーション能力の向上に関し、英語に関する「スキル」向上以前に留意しなければならない姿勢について、このようなセミナーに出席することで考える機会を得られたことが良かった。
- ・プレゼンテーションのビジュアル(PPT スライド)の見やすさについて考えるチャンスを得たこと及び、改善に向けた明確な方針を講師の指導により理解出来た事が良かった。
- ・本セミナーを受講した後の印象として、恐らく現教職員の大半が作成するスライドは、聴衆のためではなく、プレゼンを行う人自身のためになっていると思える。(抜本的な改善が必要と言うこと。)

- ・英語の「スキル」向上そのものには、時間が不十分なこともあり、必ずしも有用では無かった。従って、1)英語スキルそのものを向上させる研修、2)5G=I セミナーのように、プレゼンテーション能力の研鑽を中心とする研修は別物と考え、その両方について受講できる態勢が、英語による講義の実施に際して必要と考えられる。

<B 先生>

- ・まず一言で言って、予想を遙かに超えて、非常に有意義なセミナーでした。その意味で、参加したことが非常にラッキーであったと思います。正直なところ最初は、ネガティブではなかったのですが、積極的に参加したいと思うものもありませんでした。参加されたほかの方に、最初に聞いた時もほぼ同様の回答でした。しかしながら、非常に大変でしたが(初日の夜は宿題であまり眠れませんでしたし、翌日の朝は同様によく寝てないなどすぐにわかる方もいらっしゃいました)、これほど自分にとって身になっていると思えるセミナーはありませんでした。
- ・英語での講義についてのことはなかったのですが、英語でのプレゼンはもちろん、日本語でのプレゼンにとっても有意義なことがたくさんありました。その意味で、非常によかったと思います。
- ・通常、FDと言っても、ほとんどはFDをやっているというポーズだけで、終わってもほとんど何も残らないというのが多いのですが、このセミナーは別でした。同時に、ぜひお願いしたいのですが、「FD はやはりこのようなものでなければいけない」と思います。誰も参加したがらず、しょうがなく参加してもやっぱり無意味だったなというようなFDはすべきでないなと強く感じました。
- ・肥田先生の最後のアンケートにも書いたのですが、もしフォローアップのセミナーがあれば、もう一度参加したいと思うほどのものでした。

<C 先生>

- ・スピーチの基本的なことが勉強できてよかった(発声や事前の準備)。
- ・英語の発表を行い、客観的に改善点などを指摘してもらったり、他の参加者の発表を聴くなどして、実践的なことが役に立った。
- ・2~3日の研修で英語がすぐに上達するわけではないが、発表に対する心構えや準備の重要さがわかった。
- ・年末の忙しい時期に、土と日(終日)・月(半日)の3日間の開催だったので、負担が大きかった。夏休みなどの平日にするのがよいのではないか。
- ・スピーチの練習が多かったが、もっと英語での授業の方法などの内容を充実させる必要があると思われた。

<D 先生>

- ・これまで、英語プレゼンに自信があまりなかったが、堂々と自信を持ってプレゼンできるように特訓していただいたと思います。一方で、プレゼンのビジュアルに関しては、肥田先生のこだわり(字をものすごく大きく書く)があったが、それには同意できないと思った。字をできるだけ大きくするのは必要だが、あまりにも大きくしすぎると、スライド一枚あたりの情報量が減るので。
- ・本プログラムの目的は「教育の質向上」だが、5G=I セミナーで「教育の質」が向上したかどうかはわかenら(私自身のプレゼンの能力向上には繋がったが)。もう少し、「英語での講義」をどのようにしたらいいかを教えていただけたら、より良いと思います。

<E 先生>

- ・自己紹介(英語)と3テーマ(規定テーマ1つ、自由テーマ2つ)のプレゼンテーションを課され、そのPowerPointと発表原稿の事前準備に大きな労力を費やさなければなら

ないセミナーで大変でした。しかしながら、肥田先生の魅力的なお人柄に触れることができ、また他部門の先生と交流を図ることができ、たいへん有意義な3日間でした。

- ・事前に配付された日程表の内容と実際に行われたセミナーの内容には大きな違いがあったが、参加者に合わせた肥田先生の臨機応変なご対応の結果であった。
- ・規定テーマ、自由テーマともに、参加者がプレゼンテーションするだけでなく、輪番制で座長を務め、質疑応答まで行われた。実際に国際会議に参加する際に大いに参考になる実践的な練習であり、有益であった。
- ・プレゼンテーションに際して「聞こえるか?」「見えるか?」「分かったか?」という3つを考えなければならないという肥田先生のご指摘は当然のものであると思うが、実際にこれらを満たしているプレゼンテーションは少なかった。肥田先生や他の参加者の指摘を受け、PowerPointの中身や発表姿勢に改善を加えて翌日に再度発表を行うというプロセスは、今後の学会発表に向けて役立つものであった。
- ・プレゼンテーション以外に、登壇の方法、外国人とのコミュニケーションに関する注意点、耳を磨くための英語学習の方法、果ては王侯貴族への挨拶フレーズに至るまで、思いつくままに順不同で多くの質問がなされ、肥田先生からご回答を頂けた。普段なかなか尋ねられる相手がないような多くの疑問が、このセミナーで解消できた。
- ・このセミナーは肥田先生の魅力的なお人柄とお話の面白さで成立していた。出会えて良かったと感じる。また、セミナーを通して他部門の先生と親しくなることが出来た。セミナー以外の交流にも繋がるという効果があるだろう。

<F 先生>

- ・講師の方が良い意味で大変ユニークで、呼吸方法、歩き方など、普段まったく気にしないところからの「発表技術」は勉強になった。
- ・他学科・他分野の先生方のプレゼンを聴けて興味深かった。そのような先生方と顔見知りになれたことは有意義であり、できれば、セミナー期間内に懇親会的なものがあるとよかったかもしれない。
- ・年末の慌ただしい時期だったので、開催時期は夏期休暇中などがよいように思う。

<G 先生>

- ・今回5G=Iセミナーに参加しまして聴衆にわかりやすいプレゼンテーション法、特にスライドに余分な情報を書かないと言うことと聴衆を見ながらプレゼンを行うという点を学べて有意義でした。同時通訳者用の訓練が今回時間が無くてできなかったのが残念でした。また、英語での教授法や外国人の学生と日本人の学生の文化や考え方の違いなどのレクチャーも有れば良いのではないかと思います。

<H 先生>

- ・TPOに応じてやるように様々な場面で言われた。講義のやり方、ビジュアルの作り方、発表の内容、留学生の対応その他。
- ・テンプレートを作って固定することは危険。目的や条件を考えて最適な方法を探すように努める必要がある。
- ・他専攻の先生方と研究内容について発表討論することは、英語講義の練習として適すると思われる。分かりやすく話をするためのポイントを考えさせられる。

その他にも寄せられたが省略

4.3 平成22年度

4.3.1 研修期間

研修は平成22年8月7日(土)~9日(月)にかけて開催され、その研修スケジュールを

図9に示す。なお昨年に比べ、半日伸ばして同時通訳者の英語訓練等を追加して頂いた。

時間	8/07(土)	8/08(日)	8/09(月)
9:00	受付	規程課題修正オーラル・ビジュアル提出	自由課題オーラル・ビジュアル提出
9:30	規程課題オーラル・ビジュアル提出	<input type="checkbox"/> 5G=I の基礎訓練:復習	<input type="checkbox"/> 正確な英語の発音の基礎2
10:00	開講式&オリエンテーション <input type="checkbox"/> 5G=I の基礎訓練 ・発声と重心/バランス ・姿勢/歩行/呼吸/発声 ・登壇練習/アイコンタクト	<input type="checkbox"/> 正確な英語の発音の基礎1 <input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(2) 各自5分間の専門テーマの発表2回目 ・役割分担(座長、時計係) ・効果的なプレゼン	<input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(4) 2名が15分間の模擬講義練習2回目 ・効果的な英語による講義 ・討論 ・改善課題と対処
11:00	<input type="checkbox"/> 自己紹介レッスン 各自2分間の自己紹介 ・効果的な自己紹介	・効果的なビジュアル使用法 ・効果的な討論法 ・Do's & Don'ts ・Q&A ・コメント	
12:00	昼休み	昼休み	昼休み
13:00	<input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(1) 各自5分間の専門テーマの発表練習 ・役割分担(座長、時計係) ・効果的なプレゼン ・効果的なビジュアル使用法 ・効果的な討論法 ・Do's & Don'ts ・Q&A ・コメント	<input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(2):続 各自5分間の専門テーマの発表練習 ・役割分担(座長、時計係) ・効果的なプレゼン ・効果的なビジュアル使用法 ・効果的な討論 ・Do's & Don'ts ・Q&A ・コメント	<input type="checkbox"/> 自由課題レッスン(5) 各自5分間の自由テーマの発表練習
15:00	休憩	休憩	休憩
15:30 16:00	<input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(1):続	<input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(2):続 <input type="checkbox"/> 規程課題レッスン(3) 2名が15分間の模擬講義練習 ・効果的な英語による講義	<input type="checkbox"/> 同時通訳者の英語訓練 ・シャドウイングの基礎 ・シャドウイングの練習 <input type="checkbox"/> 参加者フィードバック
17:00	<input type="checkbox"/> まとめと宿題	<input type="checkbox"/> まとめ	<input type="checkbox"/> セミナー終了

宿題 ・オーラル&ビジュアルの修正 ・模擬講義の修正
・リハーサル ・リハーサル

図9 平成22年度研修スケジュール

4.3.2 研修者リスト

世話委員:出光一哉(エネルギー量子)

准教授:田中 太(海洋システム), 花田俊也(航空宇宙), 井川善也(応化機能), 阿部正明(応化分子), 齊藤敬高(材料工学)

助 教: 助永壮平(材料工学), 笹岡孝司(地球資源システム), 松根英樹(化学工学), 西山浩司(環境都市)

の計10名

4. 3. 3 研修者の声

【受講して役に立ったこと】

- ・今回の英語セミナーは、自分の研究分野の関係者に限定しない幅広い聴衆を想定したプレゼンテーションのトレーニングとして非常に学ぶべき点が多かったと思います。発表前のリラックス法、しっかりした発声法など、英語に限定されないプレゼンテーションの基本をダイレクトに教えていただいた点は今後、学会発表に限らず、講義や授業等幅広く役に立つと思います。
- ・課題の量が多くて大変でしたが、終わってみるとある程度自信がついていることがわかりました。その後、英語の講義を1回分担当する機会があり、初めての体験でしたが、何とか90分の講義をこなすことができました。セミナーを受けていたことであまり抵抗感がなく講義ができたと思います。今回、セミナーを受けたからすぐに上手くなるものではありませんが、英語の講義や発表に対する心の持ち方や考え方などを学ぶことができて有益でした。何よりも度胸がついたことがよかったです。その意味では、英語によるコミュニケーション等に対して苦手意識を持っている人の方が非常に役に立つものだと感じました。
- ・従来、我流で行っていたプレゼンテーションの方法に、第三者的な視点で指摘いただいたところ。教員になると、指摘していただける方が全くいなくなってしまう、独りよがりの発表となってしまうがちなところに、先生から修正点を色々と指摘していただいたところが最も良かったと思います。
- ・特に役に立ったことは、発表前の登壇の仕方まで練習をするのは初めての体験であったし、スライド作製する際の文字の大きさやスライド当たりの情報量等に基準の値や、ネイティブのような話し方で英語をしゃべらない方が万人に内容が理解されると教えていただいたこと。
- ・九州大学の様々な分野の研究者とお知り合いになれた点もセミナーのすばらしかった点と思っています。通常、我々は部門や群の枠内で活動しているのに対し、その枠を超えて各先生方がどのような研究をしているかについて知ることができ、とても刺激的でした。
- ・専門外の方に話すことを考えることで、自分の研究の流れ・背景を改めて整理する機会を得たことや、研究以外についても意識して取り組み、自分について表現する必要性を痛感した。
- ・今回のFDIは、英語もさることながら自分自身の発表スタンスを考える上で、非常に勉強になりました。
- ・以下のことに注意するようになった。プレゼンのスタンス(考え方)、プレゼン試料の作り方、キーフレーズ、発音。プレゼン開始は自然体で、親しい知人・友人に語りかけるように？ 自己紹介の際に、「話したいことがふたつある」というのは、用意周到と思われるかもしれないので、注意？ 第一声から計時。文字もビジュアルのひとつである。プレゼンは紹介から(登壇から)始まっている。登壇で印象が決まる？ プレゼンの調子は第一声で決まる。アイコンタクトを忘れずに。一方通行の発表ではなく、対話である。対話が成立しないと、アイコンタクトも成立しない。原稿をビジュアルにしていないから、束縛されずに話ができる。

【今後のセミナーに期待すること】

- ・資料のupdateをしていただけると更にありがたい。

- ・結構盛りだくさんだったので、内容としては十分です。予算が続く限り、継続することがいいと思います。但し、課題を多いので、教員が共通して忙しい時期は避ける等の工夫が必要かもしれません。
- ・リスニング & 自由会話をもう少し学びたい(期間を一日延長しても)。
- ・内容ではないが、時間に余裕がほしいと思われまます。1週間に1日ぐらいのペースが、改善策をより十分に練ってから、取り組むことができなあと思いました。
- ・教育・研究だけでなく、事務も含めたあらゆるセミナー、講習におけるその様子を撮影した動画について、ポッドキャストやストリーミングによる事後の配信があるといい。都合が付かない場合、様子が知りたい場合などにも役立つと思う。繰り返し見られるのも役立つと思う。優秀講義賞を授与された先生の講義を拝見して、参考にしたい。上述のポッドキャスト、ストリーミングなどを利用して。
- ・英語授業に特化したセミナー
- ・英語で授業を行うための方法論について学ぶことができればと考えています。

4. 4 まとめ

参加された先生方の「声」を読むと英語での教育方法というより、英語を語る時、プレゼンするときの心構え等を実習いただいたことに基礎として有用であったと判断する。肥田先生の研修・講義は九州大学の学内アチコチで開設されており、今回参加できなかった先生方がそれらの抗議に参加されることを切に願っている。

5. 異文化理解

5.1 国際交流支援室の設置

工学部・工学府でのグローバルコースの開設に伴い、また渡航される先生方並びに海外から来訪される方々の増加を鑑み、工学研究院に国際連携委員会を設けるとともに、全国でも珍しい工学系(工学研究院・システム情報科学研究院・統合新領域学府)の国際交流支援室を設置することとなった。国際交流支援室は、工学系の国際関連業務を総合的に支援する部署で、今後10年間で倍増すると推定される留学生や外国人研究者の増加に備え、さらに将来を見据えた支援体制を整えることが今後の重要な課題のひとつである。現在様々なプロジェクト支援を行っており、今回のEEP(工学府)展開も、国際交流支援室のサポートによるものである。

5.2 国際交流会の開催

平成21年11月5日(金)の開催を皮切りに平成22年には4月と10月の2回、計3回開催された工学府に限定せず、伊都キャンパス全体としての開催)。第1回の参加者は、留学生、教職員や外国人研究者等260名であった。

第2回伊都キャンパス国際交流会新入留学生歓迎会は、平成22年4月23日にセンターゾーンにあるビッグサンド B1F にて開催された。初回と同様21世紀プログラムの学生とKufsa に所属している工学系の修士留学生の援助を得て計画を具体化した。前回のプログラムに加えて Kufsa のパフォーマンスを加え好評を得た。参加者は教職員も含め全員で212名であった。(内外国人113名)

第3回伊都キャンパス国際交流会新入留学生歓迎会は平成22年10月8日に開催された。今回も引き続き21世紀プログラムの学生のサポートを得て、9月上旬から募集をかけ、グローバルコースの学部生17名も含め、265名の参加があった。国の内訳は、アメリカ合衆国3名、バングラデシュ4名、中国115名、コスタリカ1名、チェコ1名、エジプト1名、フランス2名、ジョージア1名、インド4名、インドネシア31名、ケニア1名、韓国18名、マレーシア2名、モロッコ1名、ミャンマー5名、ネパール1名、ナイジェリア3名、ペルー1名、フィリピン3名、シンガポール2名、スリランカ2名、スイス1名、台湾1名、タイ4名、ベネズエラ1名、ベトナム2名の合計211名そして日本と合わせて27カ国からの参加となった。今後は21世紀プログラムの学部生やKufsaとの協力を得て、さらに留学生との親睦を深めるように支援をしていく。



図10 第1回国際交流会の様子

5.3 異文化理解_食生活編

国土交通省総合政策化観光事業化が纏めた「多様な食文化・食習慣を有する外国人訪問者への対応」に関して、一部を抜粋して個々に再掲する。

多様な食文化・食習慣を有する外国人訪問者への対応

国土交通省 総合政策局 観光事業課(2008)より抜粋

「外国人訪問者が要望する」食材と料理に関する理解

・ 外国人訪問者の料理・食材に関する要望は多岐にわたるが、これらは「①食べることができないもの」、「②食べてはいけないもの」、「③食べたくないもの」の3つに整理すると分かりやすい。「①食べることができないもの」は、アレルギー症状を引き起こすなど、健康上の理由で外国人訪問者が一切口にすることができないもの、最悪の場合には死に至ってしまうものが対象となる。これに該当する食材を取り扱う場合には細心の注意を払う必要があり、外国人訪問者に対して事前に確認を取ることが重要である。「②食べてはいけないもの」は、宗教上の教義や信念に関する理由で外国人訪問者が食べることを忌避しているものが対象となる。これらは、実際に外国人訪問者が食べた場合も健康上の影響はみられないが、外国人訪問者と飲食店との深刻なトラブルを引き起こす可能性が非常に高いため、特に注意が必要である。豚肉・牛肉のエキスやスープ、豚・鯉節の出汁などが料理にわずかでも混入することに対して、敏感に反応することが多い。これに該当する食材を取り扱う場合にも十分に注意を払う必要があり、外国人訪問者に対して事前に確認を取ることが重要となる。「③食べたくないもの」は、個人の主義や嗜好に関する理由で外国人訪問者が食べることを忌避しているものが対象となる。前二者との比較では、大きな問題を引き起こす可能性は低いと言えるが、外国人訪問者の要望に合わせた的確な対応をする必要がある。

・ 取扱いに気をつけなければならない食材は以下の通りであるが、いずれも予約もしくはお店でのオーダー時に外国人訪問者に食べられないものを確認して、該当する食材を把握する必要がある。個人で勝手な判断をすることは、特にアレルギーの問題などで、非常に危険であるため、絶対に避けなければならない。

【宗教・嗜好別 取扱い注意の食材】

① ベジタリアン

◆肉全般、魚介類全般、卵、一部ではあるが乳製品、一部ではあるが根菜・球根類などの地中の野菜類、一部ではあるが五葎(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※対象国は、米国、カナダ、英国をはじめとするヨーロッパ、インドや台湾をはじめとするアジアなど、世界中に分布する。

※ベジタリアンは多種多様な種類が存在するため、「ベジタリアン」という呼称だけで、肉だけを食えない人と思いきや実際には鳥肉、魚肉、卵、乳製品を食べる人・食えない人がいるため、外国人訪問者が食べられないものが何かを正確に確認する必要がある。

※厳格なベジタリアンには、肉類を料理した調理器具が使われることを忌避する人もいる。

※魚介類全般を忌避するベジタリアンの場合、「鯉節の出汁」も対象であり、注意が必要となる。この場合には、「昆布出汁」などの野菜や海草を使った出汁を取る必要がある。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物油」を使用する。

※イカ、タコ、カニ、エビ、貝類は酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。

※「卵」については、まれに宗教上の理由から、有精卵を避けて無精卵だけを食べる人もいる。

※乳製品は「牛乳」「クリーム」「バター」「マーガリン」「チーズ」などが該当する。主に、健康上の理由によるベジタリアンが乳製品を忌避する。一般的に、宗教上の理由によるベジタリアン(ヒンドゥー教徒など)は乳製品を多く取る傾向が強い。

※根菜・球根類などの地中の野菜類は「ジャガイモ」「にんじん」「しょうが」「にんにく」「サツマイモ」などが該当し、インドのジャイナ教では、掘り起こす際に小生物を殺傷することから、食べることが禁じられている。

※五葎(ごくん)は「ニンニク」「ニラ」「ラッキョウ」「玉ねぎ」「アサツキ」が該当し、厳格な仏教徒とヒンドゥー教徒には、臭いが強く修行の妨げになるとの理由から、食べることが禁じられている。

※精進料理がベジタリアンに対応できる料理だと思いはならない。精進料理は「鰹節の出汁」を使用することがあり、その場合、魚介類全般を食べることができるベジタリアン以外には提供できない。「昆布出汁」などを使用する必要があるため、注意が必要。

※ベジタリアンには、野菜だけでなく豆腐などを使った料理も喜ばれる。欧米のベジタリアンは豆腐ハンバーグなどを好んで食べる。

※特にアジアのベジタリアンは、特定の日時や特定の期間(お釈迦様が生まれた期間など)に限定してベジタリアンになる場合もあるため、注意が必要である。

※インドのベジタリアンには、ノンベジタリアンと食事を同席することを拒否する人もいる。

② イスラム教徒

豚、アルコール、血液、宗教上の適切な処理が施されていない肉、うなぎ、イカ、タコ、貝類、漬け物などの発酵食品

※イスラム教徒は世界各地に居住しており、特にアジア、北アフリカ、中東における人数が多いとされる。中東諸国は国民の大多数がイスラム教徒であるが、世界におけるイスラム教徒の人数ではアジアが多数を占める。

※イスラム教徒は、「食材」「料理に付着する血液」「(料理が調理される)厨房」「(料理を調理する)調理器具」がイスラム教の教義に則ったものかという点に非常に敏感である。実際にはこれらのすべてを厳格に守るイスラム教徒は少数派ではあるが、すべての条件を満たした料理しか食べないイスラム教徒もいるため、注意が必要。

※特に注意が必要な食材は「豚」「アルコール」「血液」「宗教上の適切な処理が施されていない肉」である。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には豚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。ソースやスープには「豚エキス」が使われることが多い。

※「ラード」(豚の脂肪)は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

※厳格なイスラム教徒には、豚肉を料理した調理器具が使われることを忌避する人もいる。

※水餃子などの「豚を想起させる名称の料理」は、たとえ食材に豚が使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。

※アルコールは「料理酒」「調味料」(みりんなど)「香り付け」「デザート」など様々な料理に使われることがあり、特に注意が必要。

※「アルコールの使用を想起させるもの」も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。例えば、コース料理では、ワイングラスがテーブル上に置かれていることにさえ嫌悪感を表す人もいるため、アルコールを飲まない外国人訪問者のワイングラスはあらかじめ下げておく必要がある。また、実際にはアルコール以外のソフトドリンクなども出されるとしても、「カクテルパーティー」という言い方でイスラム教徒を誘うと参加を避ける人もいる。

※血液は不浄なものとして忌避される。肉類や魚の焼き具合と調理方法には気をつける方がよい。

※厳密には「宗教上の適切な処理が施されていない肉」も食べることができないため、厳格なイスラム教徒は食べることを忌避する場合もある。しかし実際は、豚肉以外の肉類ということで、牛肉、鶏肉、羊肉を食べるイスラム教徒も多い。また、魚料理は食べられる(ただし生魚を食べる習慣がない人が多い)。

※イスラム教で適切な処理を施した食材は「ハラールミール」と呼ばれ、購入することが可能な食材である。

※「うなぎ」「イカ」「タコ」「貝類」「漬け物などの発酵食品」については宗教上の教義で禁じられているわけではないが、嫌悪感を示されるので、料理の食材として扱うことは避ける方がよい。「ウロコのある魚」と「エビ」は食べられる。イカ、タコ、貝類は酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。

※日本の料理で扱う食材としては一般的ではないが、「爬虫類」「昆虫類」「肉食動物」も宗教上の教義で禁じられているわけではないが、嫌悪感を示されるので、料理の食材として扱うことは避ける方がよい。

※なおコーランの中では、「死獣の肉」「血液」「豚肉」「異神に捧げられたもの」を食べることが禁じられている。

③ 仏教

◆一部ではあるが肉全般、一部ではあるが牛肉、一部ではあるが五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、

ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※食に関する禁止事項がみられるのは、一部の僧侶と厳格な信者に限定される。特に、東アジア(中国、台湾、韓国、ベトナムなど)、中央アジア(チベット、モンゴルなど)など、大乘仏教が広がっている地域に多くみられる。

※大乘仏教では、肉食を避ける傾向が強い。また厳格な仏教徒には、臭いが強く修行の妨げになるとの理由から、五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)を食べることが禁じられる。

※一部の宗派は食べ物に禁止事項が存在し、中国系で観音信仰の人は牛肉を食べないこともある。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物性油」を使用する。

④ キリスト教

一部ではあるが肉全般、一部ではあるがアルコール類、コーヒー、紅茶、お茶、タバコ

※キリスト教では、基本的に食に関する禁止事項はほとんどない。少数派ではあるが、一部の分派では、食を含めた様々な禁止事項を規定している。

※モルモン教では、アルコール類、コーヒー、紅茶、お茶、タバコの摂取が禁じられている。

⑤ ユダヤ教徒

◆豚、血液、イカ、タコ、エビ、カニ、ウナギ、貝類、ウサギ、馬、宗教上の適切な処理が施されていない肉、乳製品と肉料理の組合せ など

※ユダヤ教では、「カシュルート」において、食べてよいものと食べてはいけないものが厳格に区別されている。ユダヤ教で食べてよい食べ物は「コーシェル」と呼ばれる。

※特に注意が必要な食材は「豚」「血液」「宗教上の適切な処理が施されていない肉」「乳製品と肉料理の組合せ」である。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には豚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。ソースやスープには「豚エキス」が使われることが多い。

※「ラード」(豚の脂肪)は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

※水餃子などの「豚を想起させる名称の料理」は、たとえ食材に豚が使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。

※血液は不浄なものとして忌避される。肉類や魚の焼き具合と調理方法には気をつける方がよい。

※イカ、タコ、エビ、カニ、貝類は酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。また、カニかまぼこなどの「カニを想起させる名称の料理」は、たとえ食材にカニが使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。

※厳密には「宗教上の適切な処理が施されていない肉」も食べることができないため、肉類を食べることを忌避するユダヤ人もいる。それほど厳格ではないユダヤ教徒であれば、牛肉、鶏肉、羊肉を食べる人もいる。また、魚料理は食べられる。

※ユダヤ教で適切な処理を施した食材は「コーシャミール」と呼ばれるが、日本国内では入手が困難である。

※乳製品と肉料理の組合せとは、“お腹のなかで乳製品と肉料理が一緒になってはいけない”ということである。乳製品と肉料理を一緒に使った料理を食べること(チーズバーガー、肉入りシチューなど)、献立の中に乳製品と肉料理が一緒に存在すること、同じ調理器具で乳製品と肉料理を一緒に煮ること、乳製品を食べた後の数時間以内に肉料理を食べること(肉料理を食べた後の乳製品も同様)も忌避される。

※日本の料理で扱う食材としては一般的ではないが、ユダヤ教の聖典では、「ラクダ」「ウサギ」「ほとんどの昆虫類」「肉食動物」「一部の鳥類(猛禽類、ダチョウ、カラスなど)など、様々なものを食べることが禁じられているため、特別な食材を使う場合には、事前に確認をする方がよい。

⑥ ヒンドゥー教

◆肉全般、牛、豚、魚介類全般、卵、生もの、五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※ヒンドゥー教徒はインド及びネパールに多数存在する。

※肉食が避けられる。肉類、卵、魚が忌避の対象となるが(卵だけ、魚だけ食べる人も)、一般的に乳製品は多量に摂取する。高位のカーストや社会的地位の高い人ほど肉食を避ける傾向が強い。

※厳格なヒンドゥー教徒には、肉類を料理した調理器具が使われることを忌避する人もいる。

※宗教上・健康上の理由や願掛けをするため、特定の日(1日や1週間など)だけ、肉食を避ける人もいる。

※肉食をする人もいる。その場合にも食べる対象は、鶏肉、羊肉、ヤギ肉に限定される。

※牛は神聖な動物として崇拝され、牛を食べることは禁忌とされる。

※豚は不浄な動物とみなされ、基本的に食べることはない。

※魚介類全般を忌避する場合、「鰹節の出汁」も対象であり、注意が必要となる。この場合には、「昆布出汁」などの野菜や海草を使った出汁を使用する必要がある。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物性油」を使用する。

※「卵」については、有精卵を避けて無精卵だけを食べる人もいる。

※一般的に、生ものを食べる習慣はない。

※厳格なヒンドゥー教徒は、五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)を食べることが禁じられる。

※自国の料理しか食べない人も多い。

※不浄の観念から、他人の料理や残り物を取り分けて食べることを拒否する。

※異なるカーストと一緒に食事をするのを嫌う人もいる。ノンベジタリアンと食事を同席することを拒否するベジタリアンもいる。

【外国人訪問者の要望別 取扱い注意の食材】

① 食べることができないもの健康上の理由で一切口にすることができない食材、最悪の場合には死に至ってしまう食材

◆そば、落花生(→食物アレルギーの症状が重篤のもの)

◆卵、乳、小麦(→食物アレルギーの頻度が高いもの)

◆あわび、いか、イクラ、エビ、カニ、サケ、サバ、オレンジ、キウイフルーツ、桃、りんご、バナナ、くるみ、牛肉、鶏肉、豚肉、大豆、まつたけ、やまいも、ゼラチン

② 食べてはいけないもの

宗教上の教義や信念に関する理由で食べることを忌避している食材

◆肉全般(注:豚、牛、鳥など、個別の動物は別項目で解説)

※ベジタリアン、一部のキリスト教徒、一部の仏教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※鳥肉を食べられるベジタリアンも存在するため、注意が必要である。

※野菜だけでなく豆腐などを使った料理も喜ばれる。欧米のベジタリアンは豆腐ハンバーグなどを好んで食べている。

※宗教上・健康上の理由や願掛けをするため、特定の日(1日や1週間など)だけ、肉食を避ける人もいる。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物性油」を使用する。

◆宗教上の適切な処理が施されていない肉

※イスラム教徒、ユダヤ教徒が対象となる。

※厳密には「宗教上の適切な処理が施されていない肉」も食べることができないため、厳格な信者は食べることを忌避する場合もある。しかし実際は、豚肉以外の肉類ということで、処理の施されていない牛肉、鶏肉、羊肉を食べる人もいる。

◆豚

※ベジタリアン、イスラム教徒、一部のキリスト教徒、一部の仏教徒、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には豚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。ソースやスープには「豚エキス」が使われることが多い。

※「ラード」(豚の脂肪)は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

◆牛

※ベジタリアン、一部のキリスト教徒、一部の仏教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒、一部の台湾人、一部のタイ人が対象となる。

※ヒンドゥー教では牛は神聖な動物として崇拝され、牛を食べることは禁忌とされる。

※中国系で観音信仰の仏教徒は牛肉を食べないこともある。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には豚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。ソースやスープには「豚エキス」が使われることが多い。

※「バター」(牛乳の脂肪)と、「ヘット」(牛の脂肪)は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

◆馬

※ベジタリアン、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※「馬油」は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

◆ウサギ

※ベジタリアン、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

◆魚介類全般（注：イカ、タコなど、個別の魚介類は別項目で解説）

※ベジタリアン、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※魚肉を食べられるベジタリアンも存在するため、注意が必要である。

※魚介類全般を忌避するベジタリアンの場合、「鰹節の出汁」も対象であり、注意が必要となる。この場合には、「昆布出汁」などの野菜や海草を使った出汁を取る必要がある。

※精進料理がベジタリアンに対応できる料理だと思いきや、精進料理は「鰹節の出汁」を使用することがあり、その場合、魚介類全般を食べることができるベジタリアン以外には提供できない。「昆布出汁」などを使用する必要があるため、注意が必要。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「魚油」は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

◆イカ、タコ、エビ、カニ、ウナギ

※ベジタリアン、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※イカ、タコ、エビ、カニは酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。

※カニかまぼこなどの「カニを想起させる名称の料理」は、たとえ食材にカニが使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。

◆貝類

※ベジタリアン、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※酢の物などに使われることがあるため、注意が必要。

◆血液

※イスラム教徒、ユダヤ教徒が対象となる。

※血液は不浄なものとして忌避される。肉類や魚の焼き具合と調理方法には気をつける方がよい。

◆卵

※ベジタリアン、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒が対象となる。

※卵を食べられるベジタリアンも存在するため、注意が必要である。

※宗教上の理由で、有精卵を避けて、無精卵だけを食べる人もいる。

◆乳製品

※主に、健康上の理由によるベジタリアンが対象となる。宗教上の理由によるベジタリアン(ヒンドゥー教徒など)は乳製品を多く取る。

※「牛乳」「クリーム」「バター」「マーガリン」「チーズ」などが該当する。

◆乳製品と肉料理の組合せ

※ユダヤ教徒が対象となる。

※乳製品と肉料理の組合せとは、“お腹のなかで乳製品と肉料理が一緒になってはいけない”ということである。乳製品と肉料理を一緒に使った料理を食べること(チーズバーガー、肉入りシチューなど)、献立の中に乳製品と肉料理が一緒に存在すること、同じ調理器具で乳製品と肉料理を一緒に煮ること、乳製品を食べた後の数時間以内に肉料理を食べること(肉料理を食べた後の乳製品も同様)も忌避される。

◆ハチミツ

※一部のベジタリアン、厳格なジャイナ教徒が対象となる。

◆根菜・球根類などの地中の野菜類

※台湾や中国の素食家、厳格なジャイナ教徒が対象となる。

※「ジャガイモ」「にんじん」「しょうが」「にんにく」「サツマイモ」などが該当する。

◆五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※厳格な大乘仏教の教徒、ヒンドゥー教徒が対象となる。

◆アルコール類

※イスラム教徒、一部のキリスト教徒などが対象となる。

※アルコールは「料理酒」「調味料」(みりんなど)「香り付け」「デザート」など様々な料理に使われることがあり、特に注意が必要。

※イスラム教徒には、「アルコールの使用を想起させるもの」も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。例えば、コース料理では、ワイングラスがテーブル上に置かれていることにさえ嫌悪感を表す人もいるため、アルコールを飲まない外国人訪問者のワイングラスはあらかじめ下げておく必要がある。また、実際にはアルコール以外のソフトドリンクなども出されるとしても、「カクテルパーティー」という言い方でイスラム教徒を誘うと参加を避ける人もいる。

◆コーヒー、紅茶、お茶、タバコ

※一部のキリスト教徒(モルモン教徒など)が対象となる。

宗教・嗜好別に見た食文化・食習慣

1.ベジタリアン

(1)ベジタリアンとは

①ベジタリアン

・ベジタリアンは、本来、「命を奪う、もしくは傷つけて得られる食品を食べない人」という意味を持つ。一般には「菜食主義者」とされ、「肉や魚などの動物性食品を食べない人」を表す言葉として使われるが、実際には、鶏肉や魚介類を食べるベジタリアン、卵を食べないベジタリアン、根菜も食べないインドのジャイナ教徒など、その種類は多岐にわたり、「ベジタリアン」という言葉でひとくくりには捉えることは難しい。

・ベジタリアンになる動機も人によって様々である。宗教、健康、嗜好が理由になる場合だけでなく、近年はアニマルライツ(=動物の権利)や地球環境の保全などの理由からベジタリアンになる人も多い。

・ベジタリアンには、乳製品を食べる「ラクト・ベジタリアン」(肉類・魚介類・卵は食べない)、乳製品と卵を食べる「オボ・ベジタリアン」(肉類・魚介類は食べない)、魚介類を食べる「ペスコ・ベジタリアン」(肉類は食べない)、鶏肉を食べる「ポーヨー・ベジタリアン」(鶏肉以外の肉類は食べない)、地下茎野菜や果物だけをたべる「フルータリアン」などが存在する。最も厳格なベジタリアンは、一切の動物性食品(肉類・魚介類・乳製品・卵など)のほか、蜂蜜も食べず、革製品などの動物から得られる製品も使用しない「ヴィーガン」である。また、宗教的な理由から特定の曜日や期間に肉食を避ける人、願掛けのために肉食を避ける人もいるため、ベジタリアンの形態は千差万別であると言ってもよい。

・国際ベジタリアン連合(The International Vegetarian Union 略称IVU、1889年設立、本部:英国)では、植物性食品に加えて乳製品と卵の両方を食べてよい「ラクト・オボ・ベジタリアン」を基本的なベジタリアンと認めている。

②ベジタリアンに該当する国民

・ベジタリアンは、米国、カナダ、英国をはじめとするヨーロッパ、インドや台湾をはじめとするアジアなど、世界中に分布している。特に人数が多い国はインドで、国民の半数以上を占めるとされる。台湾では国民の約1割を占め、素食家と呼ばれる(中国にも素食家は存在する)。ヨーロッパでは

英国が最も数が多く、国民の2割弱を占めている。

(2)ベジタリアンの食習慣

①食に対する意識

- ・ 宗教を理由としたベジタリアンは、教義で定められた食事の規制事項を通じて、殺生を避けること、不浄を避けること、より高い精神性や倫理性を獲得することなどを強く意識する。信仰する教義が「生命」や「不浄」の対象をどの範囲で捉えるかによって、禁止事項が異なる。
- ・ 健康を理由としたベジタリアンは、本人の健康や美容(ダイエットなど)を強く意識する。生活習

慣病や肥満などを避けるため、カロリーや油を多く含む肉類などを食べない。また、狂牛病や口蹄疫などの病気をはじめ、食の安全性を確保するため、牛肉を含めた肉食を避ける人が近年増加している。

- ・ 本人の嗜好を理由としたベジタリアンは、本人の好みやライフスタイルなどが意識される。メディアなどの影響を受けて、肉食を避けるようになる人もいる。
- ・ 思想(アニマルライツ、地球環境の保全など)を理由としたベジタリアンは、人道、倫理、環境を強く意識する。個人の肉食だけにとどまらず、現代社会の在り方(食料生産システム、動物実験、環境問題)に対する社会思想や社会運動にまで関連してくる傾向が強い。
- ・ ベジタリアンの意識において、上記の宗教・健康・嗜好・思想などの理由が混在していることも多くみられる。

②日常の食事パターン例

- ・ ベジタリアン特有の食事パターンというものはない。さまざまな民族や宗教の信者がベジタリアンに該当するため、それぞれの食生活の中において適切な食材が選択されている。
- ・ 厳格なベジタリアンの場合、肉類など特定の食材が混入することへの不安から、外食を避けることもある。

③ベジタリアン料理の特徴

- ・ ベジタリアンが多い国ではベジタリアン向けのレストランが存在し、ベジタリアン向けに用意された料理が提供されている。また、一般のレストランにベジタリアンメニューが置いてある国もある。扱われている食材や料理の形態は国や地域によって様々である。
- ・ 台湾や中国の料理店でみられる「素食」(精進料理)は、湯葉、豆腐、グルテン、こんにやくなどの食材を使用し、肉や魚に近い食感・味付けがされており、独自の形態を見せている。また、マクドナルドなど、世界各国に店舗を持つファーストフード店では、その国や地域において食べてよい食材を用いた商品を開発し、提供している。

④食に対する禁止事項と嫌悪感

肉全般、魚介類全般、卵、一部ではあるが乳製品、一部ではあるが根菜・球根類などの地中の野菜類、一部ではあるが五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※ベジタリアンは多種多様な種類が存在するため、「ベジタリアン」という呼称だけで、肉だけを食えない人と思いこんではならない。実際には鳥肉、魚肉、卵、乳製品を食べる人・食えない人がいるため、外国人訪問者が食べられないものが何かを正確に確認する必要がある。

※厳格なベジタリアンには、肉類を調理した調理器具が使われることを忌避する人もいる。

※魚介類全般を忌避するベジタリアンの場合、「鰹節の出汁」も対象であり、注意が必要となる。この場合には、「昆布出汁」などの野菜や海草を使った出汁を取る必要がある。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物性油」を使用する。

※イカ、タコ、カニ、エビ、貝類は酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。

※「卵」については、まれに宗教上の理由から、有精卵を避けて無精卵だけを食べる人もいる。

※乳製品は「牛乳」「クリーム」「バター」「マーガリン」「チーズ」などが該当する。主に、健康上の理由によるベジタリアンが乳製品を忌避する。一般的に、宗教上の理由によるベジタリアン(ヒンドゥー教徒など)は乳製品を多く取る傾向が強い。

※根菜・球根類などの地中の野菜類は「ジャガイモ」「にんじん」「しょうが」「にんにく」「サツマイモ」などが該当し、インドのジャイナ教では、掘り起こす際に小生物を殺傷することから、食べることが

禁じられている。

※五葷(ごくん)は「ニンニク」「ニラ」「ラッキョウ」「玉ねぎ」「アサツキ」が該当し、厳格な仏教徒とヒンドゥー教徒には、臭いが強く修行の妨げになるとの理由から、食べることが禁じられている。

※精進料理がベジタリアンに対応できる料理だと思いきんではない。精進料理は「鰹節の出汁」を使用することがあり、その場合、魚介類全般を食べることができるベジタリアン以外には提供できない。「昆布出汁」などを使用する必要があるため、注意が必要である。

※ベジタリアンには、野菜だけでなく豆腐などを使った料理も喜ばれる。欧米のベジタリアンは豆腐ハンバーグなどを好んで食べる。

※特にアジアのベジタリアンは、特定の日時や特定の期間(お釈迦様が生まれた期間など)に限定してベジタリアンになる場合もあるため、注意が必要である。

※インドのベジタリアンには、ノンベジタリアンと食事を同席することを拒否する人もいる。

⑤テーブルマナー

・ベジタリアン特有のテーブルマナーは存在しない。民族や宗教上のテーブルマナーが適用される。

⑥日本の食事で好まれるもの

<食事内容>

・一般に、野菜天ぷら、豆腐を使った料理が好まれる。

⑦日本の食事で嫌われるもの

<食事内容>

・野菜天ぷらは好まれるが、エビ・魚・肉類と一緒に(同じ油で)揚げることを嫌う人もいる。

<情報提供>

・ベジタリアンに対応しているレストランに関する情報提供がほとんどないため、どこで食事を取ればよいのか分からない。

⑧ベジタリアンに対して良いもてなしをするための推奨事項

<サービス>

・ベジタリアンは多種多様な種類が存在するため、「ベジタリアン」という呼称だけで、肉だけを食えない人と思いきんではない。実際には鳥肉、魚肉、卵、乳製品を食べる人・食えない人がいるため、外国人訪問者が食べられないものが何かを必ず正確に確認する必要がある。

・相手の国籍が分かる場合には、事前にその国のベジタリアンの特性を理解したうえで、食べられない食材については必ず確認する。個別の対応を取ると喜ばれる。

<情報提供>

・料理の食材が明確でないと安心して食べることができない人も多いため、オーダーを受ける際には、料理に含まれる食材・含まれない食材(豚肉、牛肉など)について説明するとよい。食の禁止事項を確認する場合、まずベジタリアンかノンベジタリアンかを確認する。ノンベジタリアンであれば食べられない肉がないか確認する(宗教上の理由で牛肉と豚肉が食べられないことがあるが、鶏肉とマトンは食べられることが多い)。ベジタリアンであれば、食べられない野菜がないか確認する(まれに、根菜・球根類などの地中の野菜類、五葷(ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)を食べられないことがある)。

・ベジタリアン対応が可能なホテルやレストランでは、あらかじめ「ベジタリアン対応が可能です」などの案内をメニューやホームページなどで示すことも検討するとよい。

⑨食事以外の禁止事項

・最も厳格なベジタリアンであるヴィーガンは、毛皮・革製品や一部の化粧品など、動物から得られる製品の使用も避ける。

2.イスラム教

(1)イスラム教とは

①イスラム教

・7世紀初めにアラビアのモハンマドが預言者として神から授かった宗教である。唯一神「アラー」を信じる一神教で、「コーラン」を聖典とする。キリスト教、仏教とともに三大宗教の1つに数えられる。

・イスラム教は「スンニ派」と「シーア派」の2つに大きく分類できる。

・スンニ派における信仰の基本は、「六信」(唯一神アラー、天使、啓典、預言者、終末と来世、予定(天命))を信じること、実行すべき基本的義務として「五行」(信仰告白、礼拝、喜捨、断食、メッ

カへの巡礼)にまとめられる。シーア派では「五信十行」と呼ばれる。

②イスラム教徒に該当する国民

・イスラム教徒は世界各地に居住しており、特にアジア、北アフリカ、中東における人数が多いとされる。中東諸国は国民の大多数がイスラム教徒であるが、世界におけるイスラム教徒の人数ではアジアが多数を占める。

(2)イスラム教徒の食習慣

①食に対する意識

・宗教が生活の土台となっており、食生活を含め、個人の宗教や信条を遵守する傾向が強い。食事の規制事項があるため、口に入れる食材に対して非常に気を遣う。

・イスラム教徒は、「食材」、料理に付着する「血液」、調理される「厨房」と「調理器具」がイスラム教の教義に則ったものであるかということに対して、非常に敏感である。多くのイスラム教徒は「厨房」と「調理器具」まで厳密に確認しようとはしないが、敬虔なイスラム教徒には、豚を扱った厨房と調理器具で調理される料理を拒否する人もいる。

・料理の食材が明らかでない場合には、その料理を食べることを拒否する人も多い。

・食事は、信徒に対する神からの報酬と考えられており、食事を楽しむことを重視する。

②日常の食事パターン例

・イスラム教徒の食事回数は、通常、1日3回。メインとなる食事は、国や地域における食生活の傾向が影響する(昼食メインや夕食メインなど)。

・豚肉などの禁止されている食材が混入することへの不安から、外食を避ける人もいる。

・イスラム暦9月に1ヶ月にわたる断食期間(ラマダンと呼ばれる)がある。断食期間中は、夜明けから夜になるまで、一切の飲食が禁じられる(水も飲んではいけない)。喫煙、性的な営みも禁止される。この期間の食事は、通常、夜明け前と夜の2回である。断食期間中ということもあり、夜の食事は、普段の食事よりもたくさんの量の食事を食べる。また、短期の旅行期間中に断食期間が重なった場合には、断食しないこともある。乳児や幼児、体調が優れない者は断食をしなくてよい。イスラム教徒は6~7歳頃から断食を始める(最初はお昼までなど、徐々に身体を慣らしていく)。

③イスラム料理の特徴

・イスラム教徒が多い国では、イスラム教徒の教義の則った適切な食材を扱い、家庭料理や外食での料理が作られている。扱われている食材や料理の形態は国や地域によって様々である。また、海外から輸入した肉類などの食材や食品には、それらがイスラム教の教義に則ったものであることを表すために「ハラルマーク」(アラビア語や英語で“HALAL”と書かれる)を付けてあることが多い。

・イスラム教徒が多い国では、マクドナルドなど、世界各国に店舗を持つファーストフード店は、その国や地域において食べてよい食材を用いた商品を開発し、提供している。

④食に対する禁止事項と嫌悪感

豚、アルコール、血液、宗教上の適切な処理が施されていない肉、うなぎ、イカ、タコ、貝類、漬け物などの発酵食品

※特に注意が必要な食材は「豚」「アルコール」「血液」「宗教上の適切な処理が施されていない肉」である。

※豚は食べるだけでなく、見ることも嫌悪する人が多い。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には豚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。ソースやスープには「豚エキス」が使われることが多い。

※「ラード」(豚の脂肪)は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

※厳格なイスラム教徒には、豚肉を料理した調理器具が使われることを忌避する人もいる。

※水餃子などの「豚を想起させる名称の料理」は、たとえ食材に豚が使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため注意が必要。

※アルコールは「料理酒」「調味料」(みりんなど)「香り付け」「デザート」など様々な料理に使われることがあり、特に注意が必要。

※「アルコールの使用を想起させるもの」も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。例えば、コース料理では、ワイングラスがテーブル上に置かれていることにさえ嫌悪感を表す人もいるため、アルコールを飲まない外国人訪問者のワイングラスはあらかじめ下げておく必要がある。また、実

際にはアルコール以外のソフトドリンクなども出されるとしても、「カクテルパーティー」という言い方でイスラム教徒を誘うと参加を避ける人もいる。

※血液は不浄なものとして忌避される。肉類や魚の焼き具合と調理方法には気をつける方がよい。

※厳密には「宗教上の適切な処理が施されていない肉」(自然死、病死、事故死した肉を含む)も食べることができないため、厳格なイスラム教徒は食べることを忌避する場合もある。しかし実際は、豚肉以外の肉類ということで、牛肉、鶏肉、羊肉を食べるイスラム教徒も多い。また、魚料理は食べられる(ただし生魚を食べる習慣がない人が多い)。

※イスラム教で適切な処理を施した食材は「ハラールミール」と呼ばれ、購入することが可能な食材である。

※「うなぎ」「イカ」「タコ」「貝類」「漬け物などの発酵食品」については宗教上の教義で禁じられているわけではないが、嫌悪感を示されるので、料理の食材として扱うことは避ける方がよい。「ウロコのある魚」と「エビ」は食べられる。イカ、タコ、貝類は酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。

※日本の料理で扱う食材としては一般的ではないが、「爬虫類」「昆虫類」「肉食動物」も嫌悪感を示されるので、料理の食材として扱うことは避ける方がよい(宗教上の教義で禁じられているわけではない)。

※なおコーランの中では、「死獣の肉」「血液」「豚肉」「異神に捧げられたもの」を食べることが禁じられている。

・ハラールミールを扱うお店には、厳密には以下の規程が定められており、これらの条件を満たしたお店の料理しか口にしないイスラム教徒も存在する。しかし実際は、このような厳格なイスラム料理を要求するイスラム教徒は少数派であるといつてよい。

<ハラールミールを扱うお店の条件>

○調理場に対する制約(ハラールミール以外は一切扱わない)

○調理器具に対する制約(ハラールミール以外は一切扱わない)

注)国や地域によっても異なるが、イスラム教徒以外の人々が店を訪れる可能性があるため、アルコールを用意している店も多い。ただし、イスラム教徒にアルコールを提供することはできない。

注)厳格なお店では、イスラム教徒以外が食材に触れる場合は、薄い手袋を付けて直接触れないようにすることもある。

<ハラールの屠殺方法>

1)イスラム教徒が屠殺を行うことが条件(イスラム教徒であれば誰が行ってもよい)。

2)動物の顔をメッカの方向に向け、アッラーファクバル(アッラーは偉大なり)と唱え、鋭い刃で頸動脈を切る。首を全部切り落とさない(全部切り落とすとハラールではなくなる)。

3)血液を全て抜く(逆さにつるすなど)。血液を出し切るまで肉を使ってはならない。血液が全て抜け、真っ白になった肉がハラールミールとして扱われる。

⑤テーブルマナー

・イスラム法(「シャリーア」と呼ばれる)は食事のマナーも定めている。食事前と食後には祈りの言葉(成句)を唱える。また、食事をする場合、相手に料理を手渡す場合、給仕する場合には右手を使い、左手を使ってはならない。

・その国や地域における食習慣に合わせて、右手、フォーク、ナイフ、スプーンなどを使って食事を取る。

⑥日本の食事で好まれるもの

・天ぷらが好きな人が多い。

⑦日本の食事で嫌われるもの

<食事内容>

・肉を扱う料理は、豚肉が混入することへの不安から、食材や調味料が明らかでない場合には忌避されることが多い。特に豚エキスに対する不安感がとても大きい。

・生魚は、食べる習慣がない国が多いため、好まれないことが多い。

・内陸部に暮らしている人は魚介類を食べる習慣がないことも多いため、魚介類の料理全般を好まない人もいる。

・インスタントラーメンは、フリーズドライでも、豚のスープで作られているため、食べることを避ける。

<情報提供>

・ イスラム教徒に対応しているレストランに関する情報提供がほとんどないため、どこで食事を取ればよいのか分からない。

⑧イスラム教徒に対して良いおもてなしをするための推奨事項

<食事内容>

・ 豚肉とアルコールについては、食材や各種調味料の一つひとつにできるだけ気を遣って確認をする方がよい。厳格なイスラム教徒は、豚肉を調理した調理器具を使われることを忌避することもある。多くのイスラム教徒はそこまで厳密な確認をしないが、基本的にイスラム教徒は同じような心情を持っているため、相手の気持ちを配慮する必要がある。

<サービス>

・ 相手の国籍が分かる場合は、事前にその国のイスラム教徒の特性を理解したうえで、食べられない食材を必ず確認する。個別の対応を取ると喜ばれる。特に手を使う料理を出す場合、右手が届き易い場所に置くとよい。

・ イスラム教徒は1日5回の礼拝を行うため、礼拝の場所と時間について配慮するとよい。特に食事時間の前後が礼拝の時間と重なることがあるため、リクエストがあった場合に対応できるように、適当な部屋を準備・案内することを想定しておいた方がよいこともある。

<情報提供>

・ 料理の食材が明確でないと安心して食べることができない人が多いため、オーダーを受ける際には、料理に含まれる食材・含まれない食材(豚肉、牛肉など)について説明するとよい。

・ ハラル料理を提供できるホテルやレストランでは、あらかじめ「ハラル料理が提供できます」などの案内をメニューやホームページなどで示すことも検討するとよい。

・ ビュッフェ形式の場合、牛肉を扱っている料理には「beef」、豚肉を扱っている料理には「pork」など、食材を識別できるように情報提供をする方がよい。豚の姿を見ることも嫌悪されるため、メニューに「豚のイラスト」を書くことは避けるべきである。

・ イスラム教徒が礼拝をする際に、方角(東西南北)を尋ねられる場合があるため、尋ねられる前にあらかじめ確認をしておいた方がよい。

<その他>

・ イスラム教徒は1日5回の礼拝を行うため、イスラム教徒を相手にスケジュールを立てる場合には、配慮が必要である。

・ イスラム教の断食月の期間には、イスラム教徒の前で飲食を取ることは避ける方がよい(イスラム教徒は日中、水を含めて一切の食事を食べないため、配慮が必要である)。同様に、断食月の期間にイスラム教徒を相手にスケジュールを立てる場合、日中の運動やハードスケジュールは避ける方がよい。ただしイスラム教徒はその日の断食を終えた後(=夜)にたくさんの食事を食べるため、多くの食事を提供するとよい。

⑨食事以外の禁止事項

・ 人と挨拶する際に、相手が同性の場合は、軽い会釈もしくは右手で握手をする。相手が異性の場合、相手が握手を求めてこない限り、身体的な接触は避ける。

・ 頭は神聖なものだと考えられており、人の頭(子供の頭も)を触らない。

・ 左手を使うことは避けられる。

・ 露出の多い服装ははしたないと思われるため、避ける方がよい。

・ イスラム教徒の女性は、家族以外の男性に対して髪を隠すことが礼儀正しいとされる。

・ 犬は不浄な動物と考えられており、嫌われる。

・ 日本や欧米の香水はアルコールが含まれることが多いため、好まない(香水を付けること自体は好まれる)。

・ イスラム教では、偶像崇拜が禁じられている。

・ イスラム教国では、金曜日が集団礼拝の日として休日になることが多い(安息日ではない)。

※ハラルミールには、牛肉、マトン(1歳以上の羊肉)、鳥肉が存在する。牛肉は比較的安価に入手できるが、マトン、鶏肉はやや高価である。

3.仏教

(1)仏教とは

①仏教

・ B.C.5世紀頃に釈迦を開祖として生まれた宗教で、仏となるための教えを説く。イスラム教、キリ

スト教とともに三大宗教の1つに数えられる。

・ 仏教は「上座部仏教」と「大乘仏教」の2つに大きく分類できる。紀元前後に「大乘仏教」が発生し、それ以前の伝統仏教は「上座部仏教」と呼ばれるようになった。

②仏教徒に該当する国民

・ 仏教徒は世界各地に居住しているが、その9割以上はアジアに分布する(特に東アジアと東南アジアに広く分布)。仏教徒が多い国は、中国、日本、タイ、ベトナム、ミャンマー、スリランカ、カンボジア、韓国などである。

・ 上座部仏教は、タイ、ミャンマー、スリランカ、カンボジアなど、南アジアを中心に広まっている。

・ 大乘仏教は、東アジア(中国、台湾、韓国、日本、ベトナムなど)、中央アジア(チベット、モンゴルなど)などを中心に広まっている。日本には6世紀に伝来した。

(2)仏教徒の食習慣

①食に対する意識

・ 一般には、殺生すること、生き物を傷つけることを慎むという意識がみられるが、肉食をする人も多い。同じ仏教徒でも、宗派や国などによって、食に対する意識は異なる。

・ 僧侶などの厳格な仏教徒は、食事そのものを日常の修養の一つとして捉える。

②日常の食事パターン例

・ 厳格な僧侶の場合は教義に則った食事を取る。上座部仏教の僧侶は、通常1日2食で、午前中に食事を済ませて、午後以降は食事を口にしない(朝に托鉢をして、朝の勤行の前に1食、午前11時頃に1食を取る。ただし、肉食は許されている)。

③仏教の料理の特徴

・ 仏教からできた料理の一つに、精進料理がある。(鰹節の出汁を使用した場合、魚介類を食べないベジタリアンには提供できないので、注意が必要)。

④食に対する禁止事項と嫌悪感

・ 一部ではあるが肉全般、一部ではあるが牛肉、一部ではあるが五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※食に関する禁止事項がみられるのは、一部の僧侶と厳格な信者に限定される。

※大乘仏教では、肉食を避ける傾向が強い。また厳格な仏教徒には、臭いが強く修行の妨げになるとの理由から、五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)を食べることが禁じられる。

※一部の宗派には食べ物に禁止事項が存在する。中国系で観音信仰の人は牛肉を食べないこともある。

※上座部仏教では、肉を食べてもよいとされる。ただし、僧侶のためにわざわざ生き物を殺して肉を提供することは禁じられている。また、在家(出家をしないで一般の生活をしながら仏教に帰依する人)は肉に関わる職業に就いてはならない。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物油」を使用する。

⑤テーブルマナー

・ 僧侶などの厳格な仏教徒は食事そのものを日常の修養の一つとして捉えており、宗派によって差異はあるが、食事作法が存在する。一般的には、食前と食後に祈りの言葉が捧げられる。また禅宗では、食事の献立、調理方法、食事をする際の心構えや作法などについての細かい決まりがある。

4.キリスト教

(1)キリスト教とは

①キリスト教

・ イエスを救世主として信じる宗教である。聖典は「聖書」である。イスラム教、仏教とともに三大宗教の1つに数えられる。

・ キリスト教は様々な教派に分かれており、代表的なものに、ローマ・カトリック教会、東方正教会、プロテスタント諸教会が存在する。

②キリスト教徒に該当する国民

- ・ キリスト教徒は世界各地に居住しており、特にヨーロッパ、アメリカ大陸における人数が多いとされる。
- ・ 東方正教会の信者はロシア、東欧諸国、ギリシアに多く存在し、それ以外の国では少数派である。
- ・ 食に関する規制事項がみられる末日聖徒イエス・キリスト教会(通称モルモン教)とセブンスデー・アドベンチスト教会はいずれも米国に本部があり、また米国内の信者も多い。

(2)キリスト教徒の食習慣

①食に対する意識

- ・ キリスト教では、基本的に、食に関する禁止事項はほとんどないと考えてよい。宗教儀式や断食を行う場合を除いて、自由に食事を楽しんでいる。
- ・ キリスト教の一部の分派には、食を含めた様々な禁止事項を規程している宗派もあるが、少数派である(モルモン教、セブンスデー・アドベンチスト教会など)。

②日常の食事パターン例

- ・ キリスト教徒に特有の食事パターンというものには特にならぬ。さまざまな国民や民族がキリスト教徒に該当するため、それぞれの食生活の中において適切な食材が選択されている。
- ・ ローマ・カトリック教会では、「灰の水曜日」と「聖金曜日」の2日間に、「大齋」と「小齋」と呼ばれる食事規制がある。「大齋」では、18歳以上60歳未満の健康な信者が、朝食と夕食の量を抑える(同じ日に1回の十分な食事を取る)。「小齋」では、14歳以上の健康な信者が、肉食を避ける。いずれも、健康上の理由がある者は対象外となる。
- ※「灰の水曜日」と「聖金曜日」は、復活祭(イースター)直前の準備期間である「四旬節」の初日と最終日に当たる。

- ・ 東方正教会では、主に修道院を対象に、「大齋」をはじめとする長期間の齋戒(1年に4回)、1日間の齋戒(毎週水曜日、毎週金曜日)が存在する。齋戒期間中は「肉」「魚」「卵」「乳製品」「アルコール類」「オリーブ油」が避けられる(齋の種別によって異なる)。一般の信者は、これらの断食を比較的ゆるやかに実施している。

③キリスト教の料理の特徴

- ・ キリスト教は世界の歴史に深い影響を与えてきたことから、世界中の様々な国の料理の発展に影響がみられる。また、キリスト教の伝統行事(感謝祭、クリスマス、カーニバルなど)では、七面鳥、羊、魚(タラなど)などを用いた料理が食べられる。

④食に対する禁止事項と嫌悪感

- ◆一部ではあるが肉全般、一部ではあるがアルコール類、コーヒー、紅茶、お茶、タバコ
- ※キリスト教では、基本的に食に関する禁止事項はほとんどない。少数派ではあるが、一部の分派では、食を含めた様々な禁止事項を規定している。
- ※モルモン教では、アルコール類、コーヒー、紅茶、お茶、タバコの摂取が禁じられている。

⑤テーブルマナー

- ・ 一般には、食前と食後に感謝の祈りを捧げるなどの食事作法がみられる。

⑥食事以外の禁止事項

- ・ 大きな罪として、自殺を戒めている。
- ・ 数字の「13」は不吉とされ、嫌われる。

5.ユダヤ教

(1)ユダヤ教とは

①ユダヤ教

- ・ 古代イスラエルに発祥し、唯一神「ヤハウェ」を信じる一神教である。ユダヤ人を神から選ばれた選民とみなし、救世主(メシア)の到来を信じる。モーセの律法「トーラー」(キリスト教の旧約聖書中、モーセ五書を指す)、律法「タルムード」などの聖典がある。
- ・ ユダヤ教を信仰する人とその子孫が「ユダヤ人」と呼ばれるが、厳密な定義は難しい。ユダヤ教は大きく3つの宗派に分けることができる。厳格なユダヤ教徒(「正当派」)は外見に特徴があって、黒服と黒の山高帽を身につけ、髭(ひげ)ともみあげを生やしており、食事の規程も厳格に守る。現代社会に合わせて、食事の自由を認めて生活をする「改革派」に属する人たちもいる。その中間には「保守派」がいる。

②ユダヤ教徒に該当する国民

・ イスラエル共和国、米国、ロシアなど、世界各国に存在する(イスラエル共和国はユダヤ人の国家として1948年に建国された)。ユダヤ料理の食材が入手しやすい地域にまとまって住む傾向が強い。

(2)ユダヤ教徒の食習慣

①食に対する意識

- ・ 宗教が生活の土台となっており、食生活を含め、個人の宗教や信条を遵守する傾向が強い。食事の規制事項があるため、口に入れる食材に対して非常に気を遣う。
- ・ 「カシュルート」と呼ばれる食事規程が存在し、食べてよいものと食べてはいけないものが厳格に区別されている。適切な食材を選ぶのは主婦の仕事であり、食べることが適当か不明な食材は、ラビ(ユダヤの宗教指導者)に相談をして、判断を下してもらう。
- ・ 食に対して禁欲的であることが精神的だとは考えない。むしろ、心のこもったご馳走が宗教的な境地を高めると考え、断食の後の食事などを大切にす。
- ・ 規程を遵守することによって、ユダヤ人のアイデンティティを守ろうという意識も強い。

②日常の食事パターン例

- ・ カシュルートに規程された食材を選び、律法に規程された作法に基づいて食事を取る。土曜の安息日(金曜日の日没から土曜日の日没前までの期間で「サバス」と呼ばれる)や祝祭日には食べる料理も決まっている。
- ・ サバスの食事は、金曜日の夕食、土曜日の昼食、土曜日の夕食の3回で、金曜の午後特別の食事が用意される。
- ・ 禁止されている食材が混入することへの不安から、外食を避ける人も多い。
- ・ ユダヤ教には年6回の断食日が存在し、一切の飲食が禁じられる。
- ・ 過越(すぎこし)の祭り(ユダヤ教三大祭り)の期間中は、イースト菌の入ったものを食べることが禁じられる。また、食器も特別なものを使わなければならない。

③ユダヤ料理の特徴

- ・ カシュルートの規程に則った食材を使用した料理となる。チキンスープ、ゲフィルテ・フィッシュ(鱒や鯉のすり身に卵や玉ねぎを混ぜて作った団子)、ホレント(豆、肉、ジャガイモ、いろいろな野菜の煮込み)、白パン、ツィミス(かぶと人参のシロップ漬け)などが食べられる。詰め物をした魚は、典型的なユダヤ料理の1つである。
- ・ イスラエルやユダヤ教徒が多い地域では、カシュルートの規程に則った適切な食材を扱うレストランが存在する。

④食に対する禁止事項と嫌悪感

豚、血液、イカ、タコ、エビ、カニ、ウナギ、貝類、ウサギ、馬、宗教上の適切な処理が施されていない肉、乳製品と肉料理の組合せなど

※ユダヤ教では、「カシュルート」において、食べてよいものと食べてはいけないものが厳格に区別されている。ユダヤ教で食べてよい食べ物は「コーシェル」と呼ばれる。

※特に注意が必要な食材は「豚」「血液」「宗教上の適切な処理が施されていない肉」「乳製品と肉料理の組合せ」である。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には豚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。ソースやスープには「豚エキス」が使われることが多い。

※「ラード」(豚の脂肪)は、調理時に注意する必要がある。「植物性油」を代用するとよい。

※水餃子などの「豚を想起させる名称の料理」は、たとえ食材に豚が使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。

※血液は不浄なものとして忌避される。肉類や魚の焼き具合と調理方法には気をつける方がよい。

※イカ、タコ、エビ、カニ、貝類は酢の物などに使われることがあるため、注意が必要である。また、カニかまぼこなどの「カニを想起させる名称の料理」は、たとえ食材にカニが使用されていない場合も感覚的に拒絶されるため、注意が必要である。

※厳密には「宗教上の適切な処理が施されていない肉」も食べることができないため、肉類を食べることを忌避するユダヤ人もいる。専門の屠殺人が処理をして検査を済ませた肉でないと、コーシェルとは認められない。それほど厳格ではないユダヤ教徒であれば、牛肉、鶏肉、羊肉を食べる人もいる。また、魚料理は食べられる。

※ユダヤ教で適切な処理を施した食材は「コーシャミール」と呼ばれるが、日本国内では入手が困

難である。

※乳製品と肉料理の組合せとは、“お腹のなかで乳製品と肉料理が一緒になってはいけない”ということである。乳製品と肉料理を一緒に使った料理を食べること(チーズバーガー、肉入りシチューなど)、献立の中に乳製品と肉料理が一緒に存在すること、同じ調理器具で乳製品と肉料理を一緒に煮ること、乳製品を食べた後の数時間以内に肉料理を食べること(肉料理を食べた後の乳製品も同様)も忌避される。

※日本の料理で扱う食材としては一般的ではないが、ユダヤ教の聖典では「ラクダ」「ウサギ」「ほとんどの昆虫類」「肉食動物」「一部の鳥類(猛禽類、ダチョウ、カラスなど)など、様々なものを食べることが禁じられている。特別な食材を使う場合は事前に確認をするとよい。

⑤テーブルマナー

・ 食事の際には手を洗い、感謝の祈りを捧げるなど、律法によって食事の作法が定められている。

⑥日本の食事で好まれるもの

・ 肉をあまり使わず野菜と魚中心の日本の食事は、カジュアルに合った食事になるため、安心して食べられることが多い。

⑦日本の食事で嫌われるもの

・ 肉を扱う料理は、宗教上の適切な処理が施されていないため、忌避されることが多い。

<その他>

・ 日本国内ではコーシャミールの入手が困難である。

⑧ユダヤ教徒に対して良いおもてなしをするための推奨事項

<食事内容>

・ 肉類を使わず、野菜と魚を中心に扱う料理を提案するとよい。

<情報提供>

・ 料理の食材が明確でないと安心して食べることができない人が多いため、オーダーを受ける際には、料理に含まれる食材・含まれない食材(豚肉、牛肉など)について説明するとよい。

⑨食事以外の禁止事項

・ 安息日には、一切の労働が禁じられている(金銭を扱うこと、火をおこすこと、書くこと、薪を切ること、裁縫をすることなどは、すべて労働とみなされる)。

6.ヒンドゥー教

(1)ヒンドゥー教とは

①ヒンドゥー教

・ 古代インドのバラモン教と民間信仰が融合しながら形づくられたもので、インドの宗教・社会制度・文化・風習などが総合されたものを意味する。「ブラフマー」「ヴィシュヌ」「シヴァ」の三神を重要視する。輪廻と解脱の思想を根本とする。

・ インド社会においては独特な身分制度「カースト」が今も残っており、「バラモン」(司祭者)、「クシャトリア」(王族)、「バイシャ」(庶民)、「シュードラ」(隷民)の4つを基礎に、現在では2000以上のカーストが存在すると言われる。カースト内の団結は強く、カーストごとに共通の習慣を持ち、職業、飲食、交際、通婚などに関する厳格な規制が存在する(なお、インド憲法ではカーストが否定されている)。

②ヒンドゥー教徒に該当する国民

・ ヒンドゥー教徒はインド及びネパールに多数存在する。

(2)ヒンドゥー教徒の食習慣

①食に対する意識

・ 宗教が生活の土台となっており、食生活を含め、個人の宗教や信条を遵守する。ヒンドゥー教では食事の規制事項があるため、「口に入れる食材」、「食事の食べ方」(誰と一緒に食べるかなど)、「食事を食べる時間や時期」に対して、非常に気を遣う。

・ 肉食と菜食の境界が非常に強く意識されており、ベジタリアンとノンベジタリアン(非ベジタリアン)を厳格に区別する。

・ 穢(けが)れに対する意識が非常に強く、食べものを含め、他者の穢れが接触することを強く避ける。特有の社会身分制度「カースト」が存在し、異なるカーストと一緒に食事をするのも忌避される。不浄は血液や唾液で感染するものと考えられ、食器も使い捨てのものが最も清浄だと考えられている。不浄の対象はカーストや地域で異なり、絶対的な基準は存在しない。不浄を浄化する

ための方法として、菜食や断食や沐浴やヨガが行われ、高位のカーストや社会的地位の高い人ほど肉食を避ける傾向が強い。規制の度合いが厳格であるほど、浄性が高いと考えられる。

・ 一般に、男性よりも女性の方が口に入れる食材に対して厳しい意識を持つ傾向にある(女性が家庭を守るという意識が強いため)。

②日常の食事パターン例

・ 自分の家庭で安心して食べることを選択する人が多数派(外食は同じ調理器具で肉を扱っている可能性も否定できないため)。

・ 特定の宗教の祝日や特定の曜日に断食をする、願掛けのために断食する、特定の食材を一定期間食べないなど、日常的に断食をすることが多い。断食といっても完全に食を断つことは少ない(イスラム教のように厳しいものではない)。

③ヒンドゥー教の料理の特徴

・ 家庭料理を基本としており、ほとんど外食をしない。

④食に対する禁止事項と嫌悪感

◆肉全般、牛、豚、魚介類全般、卵、生もの、五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)

※肉食が避けられる。肉類、卵、魚が忌避の対象となるが(卵だけ、魚だけ食べる人もいる)、一般的に乳製品は多量に摂取する。高位のカーストや社会的地位の高い人ほど肉食を避ける傾向が強い。

※厳格なヒンドゥー教徒には、肉類を料理した調理器具が使われることを忌避する人もいる。

※宗教上・健康上の理由や願掛けをするため、特定の日(1日や1週間など)だけ、肉食を避ける人もいる。

※肉食をする人もいる。その場合にも食べる対象は、鶏肉、羊肉、ヤギ肉に限定される。

※牛は神聖な動物として崇拝され、牛を食べることは禁忌とされる。

※豚は不浄な動物とみなされ、基本的に食べることはない。

※魚介類全般を忌避する場合、「鰹節の出汁」も対象であり、注意が必要となる。この場合には、「昆布出汁」などの野菜や海草を使った出汁を取る必要がある。

※「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」には鶏・牛・豚・魚の肉や骨が使われており、調理時に注意する必要がある。

※「バター」(牛乳の脂肪)、「ラード」(豚の脂肪)、「ヘット」(牛の脂肪)、「魚油」、「馬油」などの動物性脂は、調理時に注意する必要がある。「動物性脂」が使えない場合には、「植物油」を使用する。

※「卵」については、有精卵を避けて無精卵だけを食べる人もいる。

※厳格なヒンドゥー教徒は、五葷(ごくん:ニンニク、ニラ、ラッキョウ、玉ねぎ、アサツキ)を食べることが禁じられる。

※一般的に、生ものを食べる習慣はない。

※自国の料理しか食べない人も多い。

※不浄の観念から、他人の料理や残り物を取り分けて食べることを拒否する。

※異なるカーストと一緒に食事することを嫌う人もいる。ノンベジタリアンと食事を同席することを拒否するベジタリアンもいる。

⑤テーブルマナー

・ 自分の皿によそわれたものは、不浄が感染しないように、決して他人に取り分けてはいけない(不浄は血液や唾液で感染すると考えられているため)。共用の皿から取り分ける場合には、自分のスプーンが共用の皿に触れないように気をつける。また、他人と飲み物を共有する場合には、容器に口をつけてはいけない。

・ 食前と食後には手を洗い、口をすすぐ。

・ 食事をする場合、相手に料理を手渡す場合、給仕する場合には右手を使い、左手を使ってはならない。

⑥日本の食事で好まれるもの

<食事内容>

・ 野菜天ぷら、豆腐は、ベジタリアンにもノンベジタリアンにも人気がある。

・ 日本食以外では、野菜だけのピザやパスタなど、イタリア料理も好まれる。

⑦日本の食事で嫌われるもの

<食事内容>

- ・ 寿司、刺身、アジの開き、納豆、イカ、タコ、生もの全般は嫌われる。
- ・ 野菜天ぷらは好まれるが、エビや魚と一緒に(同じ油で)揚げたものを嫌う人もいる(特に女性が多い)。
- ・ 鍋料理など、一つの鍋や皿を複数でつき合って食べる料理は拒絶される。
- ・ 自国の本格的料理以外は食べない人もいる。

⑧ヒンドゥー教徒に対して良いもてなしをするための推奨事項

<食事内容>

- ・ 人によって宗教上の食の禁止事項が存在することがあるため、相手の食べられないものを事前に把握しておくことが望ましい。ベジタリアン以外であれば、鶏肉とマトンは食べられると考えてよい。
- ・ 天ぷらなどを調理する場合、可能であれば、野菜を調理する鍋とそれ以外(魚やエビなど)を調理する鍋を別々にするとよい。
- ・ 鍋料理など、一つの鍋や皿を複数でつき合って食べる料理は避ける必要がある。
- ・ ヒンドゥー教徒に1日の食事を提供する場合、朝食(トースト、目玉焼き、シリアル、果物)、昼食(インド料理専門店)、夕食(野菜天ぷら料理)を1つの参考パターンとして考えるとよい。

<情報提供>

- ・ 料理の食材が明確でないと安心して食べることができないため、オーダーを受ける際には、料

理に含まれる食材・含まれない食材(豚肉、牛肉など)について説明するとよい。

- ・ ヒンドゥー教徒の食の禁止事項を確認するには、まずベジタリアンかノンベジタリアンかを確認する。ノンベジタリアンであれば鶏肉、マトンでの対応が可能となる。ベジタリアンであれば、根菜を食べられるかを確認する。

⑨食事以外の禁止事項

- ・ 死は最大の穢れとされている。
- ・ 頭は神聖なものだと考えられており、人の頭(子供の頭も)を触らない。
- ・ 左手を使うことは避けられる。
- ・ 女性が露出の多い服装を着ることははしたないと思われるため、避ける方がよい。

6. その他

6.1 教材開発

本事業において、平成21年度に教材開発援助の募集を行い、下記の1件について援助した。採用案件内容は次の通りである。

=英語教材作成内容=

下記の授業科目の日本語配布資料を英語資料として作り直す。

これらの科目は G30 学部英語コース並びに大学院グローバルコースの教材として使用する。・工学解析・計測概論(学部), ・工学解析・計測特論第一(大学院), ・工学解析・計測特論第二(大学院), ・日本産業論(学部), ・日本産業特論(大学院),

=補助金の用途=

・日本語教材(配布資料)の英訳・・・学生アルバイト他, ・著名テキストの表現との比較修正・・・学生アルバイト他

6.2 英語セミナー開設(教員向け, 事務職員向け)

=教員向け:FD Lectures:Presentation and Publication=

工学系教員の英語力向上のため、G30 教員 Robertson 准教授による Lecture を平成 23 年度 1 月 18 日火曜日より開催することにした。平成 22 年 12 月 3 日より募集をかけて、応募者が 24 名あった。17:00-18:30 の時間帯でウエスト 4 号館 #314 号室物質系会議室にて行われる事となった。授業内容として Presentation が 90mins x 2 回、Publication 60mins x14 回の計 16 回にわたり行われる。また、今後の対応として、受講後の教員にアンケートを行い、授業の再編成を依頼し、できるだけ多くの教員が受講できるように工夫したい。そのためには Robertson 准教授に Lecture の回数を増やすように依頼をするか、あるいは英語教員を増員することが検討される。

=事務職員向け:English Classes=

平成 22 年度 6 月 28 日(月)より、支援室スタッフの Lisa Fleming による事務職員向けの英語入門コースを週 1 回、国際教育センター所属の Akdut 教授による中級コースを週 1 回開催することとなった。初級クラスにおいては、2 期目より週 2 回、3 期目においては週 3 回にクラスを拡大し、月曜日 17:30-18:30、木曜日 12:05-12:55 は仕事に役立つ英語、金曜日 12:05-12:55 conversation、初級～中級コースは火曜日 12:05-12:55 より週 1 回行われている。今後もできるだけ多くの職員が英語を学ぶことができるよう、さらに多くのクラスを提供できるように努めたい。

7. 工学府Faculty Developmentの開催

7.1 第1回：農学研究院「英語による教育の質向上を目指して」

7.1.1 講演資料

平成21年10月15日に農学研究院の先生方を講師に招いてFDを開催した。そのときの資料抜粋を図11に掲示する。また、そのときに紹介があった「英語による授業のためのハンドブック」の表紙画を図12に示す。お忙しいなかご講演戴いた農学研究院の先生方に謝意を表す。

図11 工学府FD(英語による授業の質向上を目指して)資料抜粋(その1)

留学生と国際コース-まとめ-

- 国際コースの留学生は学府留学生全体の中で約30%を占める
- 修士課程については特に農業資源経済学専攻の学生が多い
- 修士課程ではJDSプログラム留学生が6割以上を占める
- 国際コースでは中国・韓国からの留学生は少ない

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)

現行の国際コースのしくみ

国際コース修士課程の科目類型と特徴

科目群	教育の視点	授業方式	オファー	提供する団体	修得科目数
必修科目群	研究の究極	従来の	5科目	専攻課	5科目(18単位)
モジュール科目群	基礎充実	ブロック型	5科目	専攻課(国際課)	5科目(10単位)
	分野横断				
専門科目群	専門性の強化	ブロック型	5科目	専攻専	1科目(2単位)

国際コース修士課程では、学生が所属する講座での従来型の教育を行いつつ、専攻融合型のモジュール科目群と所属専攻内での専門科目群からなるカリキュラムを編成している。
本コースのコンテンツは、「実証性」と「学際性」に特徴がある。問題解決型のコースを準備し、狭い学問分野を越えたシステム科学としての農学教育を行うことで、特定学問領域の中で教育を行う従来型教育とは異なる。

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)

修士課程留学生へのインタビュー結果 (問題分析ツリー)

留学生が感じる問題点

コミュニケーション・ティーチングスキルに関する問題
(本取組の主対象)

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)

国際コースの問題点 問題の解決に向けて(目的分析ツリー)

国際コース特別コースに満足する

コミュニケーション・ティーチングスキルに関する問題
(本取組の主対象)

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)

留学生教育実践からの教訓と提言

教訓

- 学習意欲は旺盛で実践の経験のある学生が多い
- 学生の英語力は必ずしも一様に高いわけではない
- 多専攻からなる学生のプログラムであるためニーズも背景も多様
- リレー講義形式では統一性と調整が重要
- 数的能力の強化が必要

提言

- 質の高い留学生の確保
- 機能的な留学生教育システム
- 教員の資質向上

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)

コミュニケーション・ティーチングスキルに関する問題解決

大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)
平成20年度
英語による双方向型授業モデルの構築と波及
(国際農学教育の組織的スキルアップのためのスタンダードモデル開発)
教員の英語コミュニケーション能力や英語による双方向型授業スキルの向上と学生の組織的学習能力の向上・共有化の促進

英語による教育スキルの波及・共有化プロセス

2009/3/9 平成20年度学研北関東5回FD

Step 4 ハンドブック作成

英語による授業のためのハンドブック(仮題)
- 生物資源環境科学府授業担当全教員に配布予定

1. はじめに	3. Active Learning
1.1 本書の目的	3.1 Active Learningとは
1.2 本書の構成と使い方	3.2 Interactiveな授業のための工夫
2. Classroom English	3.3 Active Learningの手法例
2.1 教室で	3.4 評価と改善
2.2 教室外で	4. 付録
2.3 シラバス	ワード集
2.4 課題・宿題	How to be a good presenter
2.5 試験	お役立ち図書・サイト集

2009/3/9 平成20年度学研北関東5回FD

工学系科目へのActive learningの導入

Course Syllabus: ME, CE, H112 Statics

Professor: John Pao E-mail: jpa@evansville.edu

Textbook: Vector Mechanics for Engineers-Statics, Beer, & Johnston, 7th Edition, McGraw-Hill
Text Online Learning Center: www.mhhe.com/beerjohnton, www.hmhonline.com
Equipment: 1) Calculator with www.math.com and www.math.com capabilities.
2) Scale, protractor, drawing compass

Active Learning Structure:
This course will make significant use of active learning techniques. As much as 50% of the class may be devoted to students working on problems, participating in learning competitions, evaluating solutions, taking concept quizzes, and other activities that are intended to engage students and reinforce their learning. Many of the activities, including homework, will be collaborative. Lecture will be used to introduce topics, to present or reinforce key concepts presented in the text, and to answer questions. Homework for a segment (typically a chapter) will be assigned at the beginning of each segment, and students may ask questions in class about the homework as they work toward its completion. In order for students to participate effectively and benefit from the active learning approach they will be responsible for preparing for class. In particular, students are expected to have read and familiarized themselves with the material in the text assigned for a day's class.

University of Evansville

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化加速プログラム(海外先進教育研究実践支援)(教育実践型)

図11 工学府 FD(英語による授業の質向上を目指して)資料抜粋(その2)

まとめ

Active learningは、従来の座学中心の受け身の講義から**学生が主体となった学習・研究を行わせるための教授法である。**

Active learningは、学習目標の設定、授業/学習活動、評価と査定がうまく統合されると、**学生の理解度の深まり、学習内容の確実な記憶、自発的な学習を導けるが、教員の負担が大きくなる**ことがある。

Active learningは理工学教育だけでなく、**自然科学教育にも有効性が認められ、多くの大学で盛んに導入されつつある。**



英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育研究実践支援×教育実践型)

まとめにかえて

・ **《Active Learningへの疑問》**

- ・ **アジア人(日本人)学生にも効果的か?**
- ・ **授業スタイルを大きく転換する必要があるのか?**

・ 問いかけ方を工夫することにより、内省的会話を助長し、学習効果を高めることが期待できる。

・ 従来の授業スタイルでも、問いかけ方、質問への対応を工夫することによって、授業がよりActiveなものとなり、理解を助ける可能性がある。

英語による授業の質の向上を目指して
平成20年度大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育研究実践支援×教育実践型)

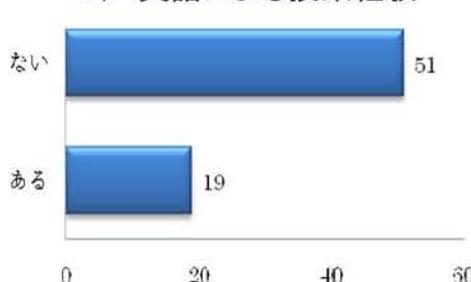
図11 工学府 FD(英語による授業の質向上を目指して)資料抜粋(その3)

7. 1. 2 FD 参加者アンケート集計結果と声

1) アンケート回答者の職位



2) 英語による授業経験



3) 英語による授業経験がある先生の職位

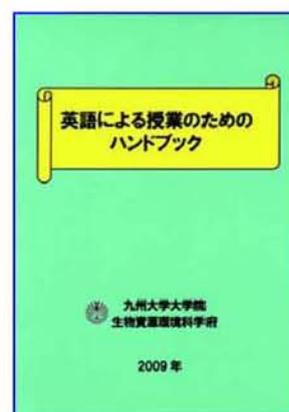
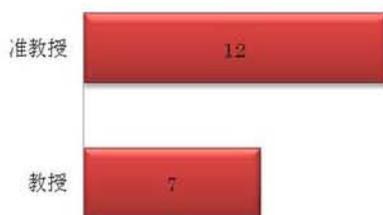


図12 農学研究院において作成されたハンドブック

【英語で授業を行うことによる問題、課題、困難について】

＝教員自身の英語力の問題＝

- ・ 英語圏で英語による授業を受講した経験がなく、自身のやり方が標準と比較してどの程度 poor なのか不明.
- ・ 小生の英語能力が低いので、授業の準備が大変. 英語でどう表現するのか分からない.
- ・ 自分の英語能力が問題.
- ・ 90 分の講義実施に十分な英語能力が不足している.
- ・ 学生との意思の疎通が困難.
- ・ 語彙力の問題. 同じ意味を複数の言葉で表現する能力が不足している.
- ・ 授業に特有の言い回しについて知識が不足している.
- ・ 大学院の講義であるため専門外の学生の理解が困難.
- ・ 自身の英語力不足.
- ・ 準備に時間がかかる.

- ・ 英語表現(授業で使う決まり文句)について知識不足.
- ・ 自身の英語スキルの問題.
- ・ ニュアンスまで伝えるだけの語学力不足.
- ・ 具体的な例を悟る能力(即興で思いついたこと).

＝学生の英語力, 学力の問題＝

- ・ 学生の英語のレベルが異なる.
- ・ 数学, 物理等の基礎学力が不足している.
- ・ 学生の基礎知識に差が大きくて, 対象を定めるのが難しい.
- ・ 学生の基礎知識が異なる(物理・化学・数学).
- ・ 一部の学生の英語力不足.
- ・ 学生に英語スキルを身につけさせることが困難.
- ・ 学生のスキルも問題. 差が大きい.

＝英語力不足による伝えるべき情報量の欠如＝

- ・ 表現方法が日本語と比較して限られる(教員・学生ともに).
- ・ 時間あたりに伝えることのできる情報量が日本語を使う場合に比べて少ない.
- ・ 日本語の講義と同等以上の質を保てるか不安を感じる.
- ・ 同じ内容を教えるのに英語では日本語より時間がかかる.

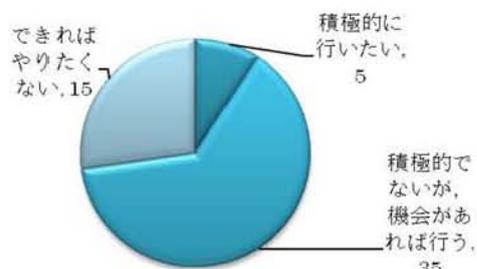
＝その他＝

- ・ 日本人修士学生に対して行っているが特に問題ない.
- ・ 広い範囲の課題を設定しようと心がけるが, 特に現在リレー形式の講義を行っているためどうしても狭い範囲にとどまってしまう.
- ・ インタラクティブになっていない.
- ・ 日本人学生に負担が大きい.
- ・ リレー形式のため学生の理解度の確認するのが難しい.
- ・ ほとんどが日本人学生で, 結局 PPT で英語, 日本語の二段書きとした(意味を正確にとってもらうために).
- ・ PPT 利用のまずさ.
- ・ 日本人学生にとっては将来有益な経験となると思う.
- ・ 両方の言葉で二重に説明することもあり時間が足りなくなった.
- ・ 学生の文化, 宗教, その他基本的なものの考え方が異なる.
- ・ 日本人も受講可能な講義の場合, 日本人の受講態度が一層受身にならないか心配.
- ・ 英語の単語(コンセプト)を日本語で理解する能力.

4) 英語による授業経験がない先生の英語講義に対する考え

【講義以外の国際コース留学生の指導等についてのコメント】

- ・ 学生実験や演習等には担当してみたいと思うが, 講義に関しては日本人学生相手に担当したことも皆無なので, 客観的評価を受けていないので何とも言えない.
- ・ 指導とは直接関係ないかもしれませんが, 留学生が大学の宿舎を出されて民間(あるいは公営)のアパートに移る際に, 指導教員に保証人を依頼するケースが多くあります. 教員個人がこのようなリスクを負う必要があるのでしょうか? 大学が対応すべきかと思えます.
- ・ 国際コースの留学生に接していると言語について強制的な部分(日本語を無理に学ぶ必要)がないということで, 日本の文化に積極的になじむ様子が見られないように感じます



(母国の習慣、宗教にもよるのかもしれませんが)。

- ・ 韓国の留学生のクラス(予備教育)で少し英語を使いましたが(日本語も不自由なので)日本語より英語の方が分からないとのことでした(一部私の発音のせいもありますが)。日本語でもそうですが準備がいると思います。
- ・ 受入体制、日常生活等、教員個人での負担が大きい点についての大学の支援体制が不十分である。
- ・ 評価法の難しさを感じた。アクティブラーニングとは、先生の手抜きになりかねないと感じた。
- ・ こちらの英語での表現がとても重要になる。
- ・ 何のために留学生を積極的に受け入れる必要があるのかよく分からなかった

5) FD 時間に対する意見

【その他自由意見・感想】

=アクティブラーニングの有効性に関する意見=

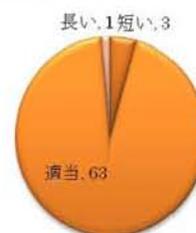
- ・ 日本語の講義に対しても大変参考になった。
- ・ 英語講義だけでなく広く日本語の講義、研究の進め方等にもつながるアイデアを得ることができた。学生の積極性の引き出し方にもヒントになった。
- ・ 英語による授業だけでなく、一般的に授業改善に役に立ちそうで勉強になりました。
- ・ 講義担当はありませんが研究室での学生指導という点でも非常に役に立つと感じました。もう少し時間をとって詳細に聞ければと思いました。
- ・ いろいろと参考になりました。今回の方法は日本人にも有効と考えます。
- ・ 自分の講義の参考になりました。
- ・ 内容は非常に濃いものでした。「英語による」という言葉が必要にないほど、授業の質の向上に活かせそうです。
- ・ 研究室でのゼミ等にも役に立つ内容でよかったと思う。
- ・ 非常に有益なお話を伺うことができました。
- ・ 大変役に立った。農学系での進んだ国際教育にとっても感心した。英語だけでなく日本語教育にも役に立つFDであった。
- ・ 多くは日本でも初等教育に使われている手法に感じた。つまり、大学教員も教育手法について1から学ぶべきであるということであろう。
- ・ 英語による授業法とアクティブラーニングのトピックは深い関連があると思いますが、前者についてノウハウを次回？もう少し伺いたいと思いました。

=工学分野でアクティブラーニング実施の可能性に関する意見=

- ・ 学部講義の場合、より基礎的な知識を習得させる講義(線形代数学、微分方程式、古典力学、流体力学など)を行うことが多いが、これらの講義でアクティブラーニングの手法が適用できるか、あるいはどのように適用できるか提案があればよかった。
- ・ アクティブラーニングは何となく理解できたが、このことと英語で工学を教えることの結びつきがあまりイメージできなかつた。
- ・ 特に工学系では与える授業内容が多く、自由度が低いので適用が難しいのではと危惧します。

=FD に対する意見=

- ・ ネイティブイングリッシュスピーカーによる模擬講義を企画していただきたい。本日のFDは大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・ FDもアクティブラーニングだといいですね。
- ・ 具体例をもっと多く紹介してほしい。



- ・ お伺いしたいことが多数で、Q&A の時間がもっと欲しかった。
- ・ 有意義なFDをありがとうございました。1コマ90分をどのような時間配分で実施されているのか事例があればよかったですと思います。

=その他意見=

- ・ 東南アジア、中国等の留学生の指導を行うことに魅力を感じない。
- ・ 各講演の先生方の発表スタイルに統一感があり聴きやすかった。
- ・ 貴重なコメントをいただくことができました。ミャンマーからの留学生が多いことが意外でした。
- ・ 英語による(非母国語)講義によって最大の教育効果を与えるための方法を学べればよいと思う。
- ・ 英語講義のガイドブックを配布(またはweb掲載)してほしい
- ・ アクティブラーニングの成果の客観的データがあるといいと思われれます。

7.2 第2回:E E P「国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修」活動の概略説明

7.2.1 講演資料

平成22年3月26日にEEP(工学府)活動報告としてFDを開催した。そのときの資料を話題提供の進行にしたがって図12～図14に掲示する。

1) EEP「国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修」活動の概略説明

表1 就職先アンケート抜粋 (工学府学生就職先に調査)

質問項目	4段階評価
1 試験・実験を計画通りし、データを解析する能力	3.3
2 生涯学習と向上心	3.3
...	...
10 学際的環境での能力発揮	2.8
11 地球規模で異文化を理解する能力	2.8
12 リーダーシップ	2.7
13 英語コミュニケーション能力と英文読解力	2.6

表2 学生定員に占める留学生数

2007年	総定員	現員	留学生数
工学部	3,216 (1,000)	3655 (1,137)	58 (0.018)
工学府修士課程	530 (1,000)	833 (1,572)	31 (0.058)
≠ 博士後期課程	378 (1,000)	356 (0,942)	76 (0.201)
研究員	—	—	36

平成21年度 教育の質向上支援プログラム(E E P)
国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修

車の両輪としての展開

平成22年度概算要求申請採択事項
特別経費(高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実)
大学院工学府改組に伴う機能別人材育成強化と工学教育改革
—コース制設置による機能分化と実効上がる実施体制の確立—
グローバルコース工学府学生の入学から終了・就職までの生活・学習環境整備と、その改善・向上がルーチンワークまたはルールのもとでのワークとして恒常的に行われる『学生サイドに立脚した仕組み』を構築する。

G30プログラム(全学)の展開 → 学部主体

図13 工学府 EEP 活動説明資料抜粋

2) 話題提供 『5G=I セミナーに参加して』

平成21年度工学部・工学府FD
(平成22年3月26日)

話題提供

『5G=Iセミナーに参加して』

工学研究院 建設デザイン部門
大嶺 聖

5G=I(ご自愛)セミナーとは

講師: ヒューテック 肥田良夫氏

5Gとは, 5 Good Things ;
 Good Message,
 Good Attitude,
 Good Preparation,
 Good Delivery, and Good Q & A

I = Impact すなわち有効性、印象深さ

図14 5G=I セミナー紹介資料抜粋(その1)

講師の先生からの最初のメッセージ

国際学会その他の場で世界の人達とよいコミュニケーションをするために、どのようなプレゼンテーションをすればよいのかを、実際にやりながら感じ、考えて行きたいと思います。

そして皆さんがさらに発表と討論の技術と内容を磨いていって欲しいと思います。

この集中講義は参加型です。準備を十分に行なって参加するほど、効果が高まり、満足度も増します。

英語によるプレゼンテーションの演習

(I) 2分間で行う自己紹介

(II) 5分間で行う自分の専門分野からのテーマによるプレゼンテーション(規定課題)
※規程課題は初日(改善前)と2日目(改善後)と2度繰り返し発表を行う。

(III) 5分間で行う自由テーマによるプレゼンテーション(自由課題)

事前準備の提出期限:

「規程課題(専門分野のテーマ)」の提出期限

11月21日午後3時(発表の3週間前)までに
(II-1) テーマとサマリー完成版とキーワード10個程度(日英対照)を送付

11月28日午後3時(発表の2週間前)までに
(II-2) 英文オーラルテキストとビジュアルのドラフトを送付

以上の準備をすることにより、自分の能力、特徴、今後の課題等が明確となる。

Mathematical Notation

Signs and Symbols and their Readings

SYMBOL	READ AS	SAMPLE USAGE	
+	plus	$a+b$	a plus b
-	minus	$a-b$	a minus b
\pm	plus or minus	12 ± 0.3	twelve plus or minus zero point three
\times	times	$a \times b$	a times b
\cdot	multiplied by		a multiplied by b
\div	divided by	$a \div b$	a divided by b
$/$	over	$\frac{a}{b}$	a over b
\geq	is greater than or equal to	$y \geq 2$	y is greater than or equal to 2
\approx	approximately equals	$a \approx 1$	a approximately equals 1
\equiv	is identical with	$x = y$	x is identical with y
\sim	is similar to	$x \sim y$	x is similar to y
\rightarrow	approaches	$x \rightarrow 0$	x approaches 0
\propto	varies as	$t \propto p$	t varies as p
∞	is proportional to		t is proportional to p
∞	infinity	$x \rightarrow \infty$	x approaches infinity
x^2	x squared	$x^2 = 4$	x squared equals four

$\frac{\partial u}{\partial x}$	the partial derivative of u with respect to x	$\frac{\partial u}{\partial x} = 0$	the partial derivative of y with respect to x is zero
$\int dx$	the integral of \dots with respect to x	$\int x^2 dx$	the integral of x squared with respect to x
$\int_a^b dx$	the integral of \dots with respect to x between the limits of a and b	$\int_0^1 (x+1) dx$	the integral of x plus 1 with respect to x between the limits of a and b
Σ	(sigma) the summation of \dots	$x = \sum_{i=0}^n i$	the summation of i from i equals zero to n
$5!$	factorial five ($5 \times 4 \times 3 \times 2 \times 1$)	$5! = 120$	factorial five equals one hundred twenty
\dot{x}	x dot the first derivative of x with respect to time	$\dot{x} = \frac{dx}{dt}$	x dot equals dx by dt
\ddot{x}	x double dot the second derivative of x with respect to time	$\ddot{x} = \frac{d^2x}{dt^2}$	x double dot equals d two y by dx squared
$A \times B$	A times B the vector product of A and B	$A \times B = A B \sin\theta$	the vector product of A and B
$A \cdot B$	A dot B the scalar or dot product of A and B	$A \cdot B = A B \cos\theta$	the scalar product of A and B equals A times B times cosine theta

まとめ

- 3日間の研修は、事前の準備を含めて負担は大きかったが、結果的に大変有意義なセミナーであった。
- 参加者が10数名程度であったので、プレゼンテーションの練習なども効果的に行うことができた。
- 年末の慌ただしい時期だったので、開催時期は夏季休暇中などがよいのでは。
- 今回は、英語での授業の方法などの内容も充実させてほしい。
- このようなセミナーを継続的に実施してほしい。

図14 5G-I セミナー紹介資料抜粋(その2)

3) 話題提供 『ハワイ・マノア校海外研修に参加して』

平成21年度
工学部・工学府FD

平成22年3月26日(金)
13時00分～15時30分
工学部大講義室
(伊都キャンパスウエストゾーン総合学習プラザ2F)

平成21年度EEP活動報告
ハワイ・マノア校海外研修に参加して

おごうせいじ
小江 誠司
工学研究院 応用化学部門

Kyushu University
Special English Program'10

Date: March 8-19, 2010
Venue: Outreach College, University of Hawai'i at Mānoa
Honolulu, Hawai'i, 96822 USA

図15 ハワイ・マノア校研修説明資料抜粋(その1)

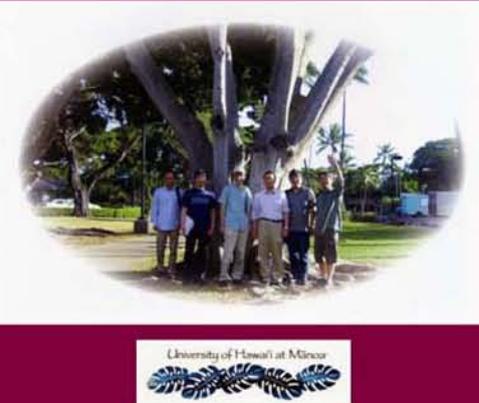
English Interaction	Presentation
<p>(1) 大事なものは、講義の説明のための英語よりも、むしろコミュニケーションのための英語。</p> <p>(2) コミュニケーションヘルパーとも言える構文(決まった言い回し)を暗記し、いつでも使えるようにしておく。</p> <p>(3) コミュニケーションスキル上達のためには、暗記した構文を練習することが大事。覚えた構文を無理やり何でも講義で使うようにした(ほうがいい)。</p>	<p>(1) 最初: 内容を示す。(Contents)</p> <p>(2) イントロ: アイコンタクト。ボディランゲージ。聴衆とのやりとり。効果的なPPT。</p> <p>(3) ボディー:</p> <p>(4) 最後: キーワードを示し、簡単にまとめる。(Summary) 何かしれなかったのかを強調する。(Conclusion)</p> <p>(5) 質問:</p>
<p style="background-color: #800040; color: white; padding: 5px;">Interviewing</p> 	

図15 ハワイ・マノア校研修説明資料抜粋(その2)

- 4) 話題提供 『教材開発について』
- 5) 今後の活動とお願い
7. 2. 2 FD 参加者アンケート集計結果と声
 - 1) あなたの職位についてお尋ねします. :

教授 18 准教授・講師 19 助教・准助教 29 計 66名
 - 2) 教育の質向上支援プログラム(EEP)についてお尋ねします.
 2. 1) このプログラムが展開されているのをご存知でしたか.

はい 50 いいえ 26
 2. 2) 来年も同様な事業展開を考えていますが、参加したい事業に○をお付け下さい.
 - ① ハワイ・マノア校での海外研修 27名
 - ② 肥田先生による5G=I セミナー24名
 - ③ 国際交流会 13名
 - ④ 教材開発の経済的支援 9名
 2. 3) 今後取り組んで欲しい課題・解決して欲しい問題などがありましたらご記入下さい.
 - ・ 英語での講義の方法
 - ・ カリフォルニアオフィスと連携を計り、定期不定期的な米国発の英語講演会開催を計画しますので、FDの一つに加えていただきたい。
 - ・ 予算の都合もあるかと思いますが、5G=Iセミナーは是非、機会を増やして欲しい。
 - ・ 教員数の増加(既にオーバーワーク。研究に加えて多量に時間を教育に使えと言われても無理)

- ・ 研究のための留学補助をして欲しい (半年間ぐらい)
- ・ ハワイ・マノア校での詳しい講義の様子が知りたいです。
- ・ 3ヶ月、6ヶ月程度の海外研修を企画して欲しい。2週間は短いのでは。
- ・ ネイティブの方による英語プレゼンテーションの研修を国内でも可能にし、より多くの人に受けさせてもらえるようにして欲しい。

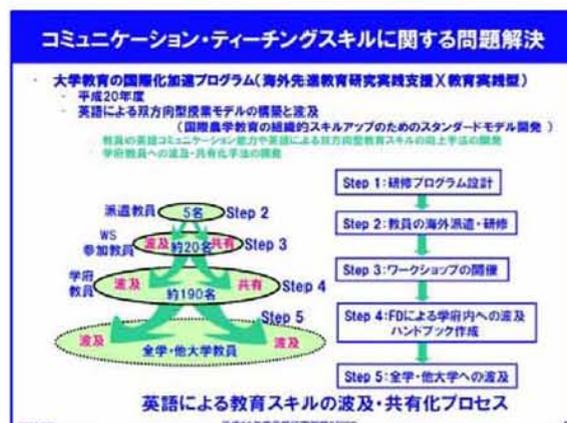


図16 教育スキルの波及・共有化プロセス

7.3 「海外研修」および「5G=Iセミナー」参加者による部門・専攻でのFD開催実績

工学府 FD のアンケート結果によれば、教員は皆、ハワイでの海外研修や学内研修の5G=Iセミナーに参加していただくことが望ましい。しかし、これには費用と時間を要する。したがって、農学研究院からの話題提供(工学府 FD において)にもあったように、図15のようなかたちでの波及が求められる。それには、ハワイでの海外研修や学内研修の5G=Iセミナーにご参加頂いた先生方によるスキルの伝授が不可欠である。このような考えのもと、研修参加者による部門・専攻内 FD の開催をお願いした。その開催実績として、機械工学部門、海洋システム部門、エネルギー量子部門、建設都市部門等において、研修者によるスキルの伝授を目的としたFDが開催されたとの報告を受けている。部門内FDにおいて使われた資料の一部を図17に掲示する。

平成22年度 教育の質向上支援プログラム (EEP)
「国際工学教育環境整備と若手教員の海外派遣」

肥田良夫先生による
「教員対象5G=I(ご自愛)セミナー」
参加報告： 西山浩司

開催期間： 平成22年8月7日(土)～9日(月)
開催会場： ウェスト2号館9階331室
受講生： 10名の教員
研修概要： 2分間の自己紹介スピーチ
5分間の専門テーマのプレゼン
5分間の自由テーマによるプレゼン
目的： 国際会議のプレゼンのスキル向上
意志伝達、コミュニケーションスキル
企画取り纏め： 出光一哉 教授

2010 Faculty Development

5G=I

Good

↓

Impact

- Message
- Attitude
- Preparation
- Delivery
- Q&A

各自課題

- ① 2分間の自己紹介スピーチ
- ② 5分間の専門テーマのプレゼン (自分の専門分野の紹介)
- ③ 5分間の自由テーマによるプレゼン (自分の趣味など)

座長の練習

Q&A

緊張を取る(身をほくす)

同時通訳の体験

発音練習

姿勢・歩行・呼吸・発声

英語による3種の模擬講義の演習 (3名が準備・15分発表)

講義内容 I: 日本、九大、自分の研究室での生活
オリエンテーション (笹岡 助教)

講義内容 II: 1学期の授業計画又は1年間の研究
計画へのオリエンテーション (出光 教授)

講義内容 III: 特定の専門テーマ
(Key Concept/Process) のオリエンテーション
(西山)

図17 西山先生が部門で5G=Iセミナーの紹介に使われた資料抜粋(その1)



図17 西山先生が部門で5G=Iセミナーの紹介に使われた資料抜粋(その2)

7.4 まとめ

英語は語学であり、上達に即効薬は無い。一は慣れであり、「意識」して使うことである。どのように意識すればよいかが、「ハワイでの海外研修」や「学内研修の5G=I セミナー」において明確にされたのではないかと考える。語学は意識伝達の手段、「教育」は意識伝達なくして存在し得ない。研修に参加された39名の先生方の「意識」が他の先生方に伝授され、そして、留学生への教育スキルとして活用されますことを願って止まない。

8. 経理報告(平成21年度および22年度の当初予算と執行額)

《平成 21 年度》

[旅費]	予算	執行
教員海外派遣旅費等	1,700,000	2,400,000
情報収集国内旅費(4回)	100,000	0
小計	1,800,000	2,400,000
[事業推進費等]		
教員海外派遣研修費	2,100,000	1,137,480
教員学内短期研修(5G=Iセミナー)	0	624,501
英語教材開発費	450,000	211,985
FD 配布資料作成費	50,000	32,746
成果印刷費	0	60,000
小計	2,600,000	2,066,712
合計	<u>4,400,000</u>	<u>4,466,712</u>

《平成 22 年度》

[旅費]	予算	執行
教員海外派遣旅費等	1,960,000	2,800,000
情報収集国内旅費(4回)	200,000	0
小計	2,160,000	2,800,000
[事業推進費等]		
教員海外派遣研修費	1,400,000	987,120
教員学内短期研修(5G=Iセミナー)	600,000	848,617
英語教材開発費	300,000	92,638
異文化理解活動費	250,000	145,112
FD 配布資料作成費	140,000	0
成果印刷費	150,000	126,513
小計	2,840,000	2,200,000
合計	<u>5,000,000</u>	<u>5,000,000</u>

9. 総括

平成23年度秋には、工学府内の全専攻において国際英語(グローバル)コースが走り出します。この事業は、工学府の国際工学教育環境に関する現状を認識し、教員の英語による教育力のレベルアップを中心に置き、教員サイドの教育環境整備を行うための仕組みづくりとしてはじめたものであります。それゆえ、本事業をきっかけにして、工学府に属する全教員の先生方の国際工学教育に対する意識改革がもたらされるものと確信しています。したがって、事業終了後も、ここで構築した仕組み(WG)をベースに、大学院生も交えた議論の場として、英語による教育力のレベルアップの研鑽が継続されていくものと願っております。また、これから実質的な国際大学を目指す九州大学の他部局にも、本事業で得た成果が情報発信されれば幸いです。そして次の議論は「Active Learning」を如何に授業に取り入れていくかではないでしょうか……。